

保存用

大学研究ノート

第28号(1977年2月)

農学系大学・学部新入学生の入学動機  
と農業に関する意識の調査・研究

その2 東日本の場合

山 谷 洋 二

広 島 大 学  
大学教育研究センター

# 目 次

はじめに .....	1
1 調査の目的 .....	1
2 調査の方法 .....	5
2-1 調査時期 .....	5
2-2 調査対象と調査の実施 .....	5
2-3 調査票の回収状況 .....	5
2-4 調査票 .....	5
2-5 結果の分析 .....	5
3 入学生の状態 .....	9
3-1 出身地域及び家の職業 .....	9
3-2 学生の性別の分布 .....	9
3-3 出身高校の種類 .....	9
3-4 教科に対する好悪感 .....	11
4 学生の進学動機 .....	11
4-1 現在の専攻を選んだ理由 .....	11
4-2 将来の進路希望 .....	13
4-3 現在の専攻に対する適合感 .....	14
4-4 大学に対する期待 .....	15
4-5 農学系の学生として最も関心の深い分野 .....	16
5 農業に関する意識 .....	17
5-1 農業に対するイメージ .....	17
5-2 学生の指摘する日本農業の問題点 .....	18
5-3 日本農業の将来性と必要性 .....	19
5-4 日本農業に対する常識 .....	21
6 学生の意識と学業教育 .....	24
6-1 学生の進学動機 .....	24
6-2 学生の状態 .....	25
6-3 農業高校の問題 .....	25
6-4 大学・農学系学部に対する期待 .....	26
6-5 農業に対する認識 .....	28
6-6 わが国の農業の現状 .....	28
6-7 農学と農学教育 .....	29
おわりに .....	32



## はじめに

この調査・研究は、昭和51年5月から6月にかけて、東日本地域の農学系大学・学部の新入学生全員を対象にして、学生の「入学動機と農業に関する意識」を調査し、3年前に西日本地域で実施した同様の調査結果<sup>1)</sup>と比較・検討したものである。

昭和30年代後半からの所謂「経済の高度成長」の中で、日本の農業は多くの問題をかかえている。このことは農学系大学・学部の学生の入学動機と農業に関する意識にも当然影響を与えずにはおかないし、また毎年1万人をこえる入学生を受入れ、日常的に農学系学生の教育に携わっているわれわれ教師にとっても少なからぬ困難をもたらしている。一方近年、大学進学率の急激な上昇による大学の大量化と、旧来の学問分野相互の間の閉鎖性に対する反省とから、多くの大学で学生の資質と期待にみあった教育組織やカリキュラムの改革の試みがなされている。この調査・報告がそうした試みを行なう上で役立つことがあれば幸いであると考えている。

本調査にあたって、調査対象大学・学部の諸先生、調査に心よく応じてくれた学生諸君に一方ならぬお世話になった。この機会に深く感謝の意を表します。この調査・研究は広島大学・大学教育研究センターの「理科系プロジェクト」の一環として行なったものである。センターその他多くの諸先生より御教示や助言をいただいた。心から感謝します。またこの調査・研究の費用の一部は文部省科学研究費補助金によった。

### 1 調査の目的

「近頃の学生は出来が良くない。やる気がない」という声をよく聞く。本当にそうなのだろうか。吾々農学系学部の教員は、学生の気持を知らずに勝手に授業をし、そういう所に学生の授業に対する不満をつのらせているのではなからうか。実際、個々の学生に当たってみると、最初から農業へ向うことを全然考えていない者や、出来るだけ農業につきたくないと考えている者、農業という狭いわくから抜け出したいと考えている者など様々である。どんな教育でも同じだが、農学教育はまず学生を知ることから始めなければならないと思う。学生の意識がわかれば、それに対応しながらわれわれ教師の意向も正しく反映出来るような効果的な農学教育が可能になるだろう。それはカリキュラムの問題かも知れないし、もっと大きな組織上の問題、さらには学部とか大学というものの考え方そのものに関わる問題かも知れない。それにしても農学系の学生について、このような関心から行なわれた広範囲の意識調査は皆無である。

このような問題関心から著者は、昭和48年と51年の2回、全国の国公立の4年制大学の農学系学部の新入学生全員を対象に、「学生の入学動機と農業に関する意識」の調査を行った。昭和48年度の西日本地域の学生を対象にした調査結果は既に発表<sup>1)</sup>してあるので、今回示したのは昭和51年度の東日本地域の学生を対象とした調査結果である。対象地域が異なり、この3年間に経済が高度成長から所謂「減速成長」の時代に入り、国民の農業に対する意識に若干の変化の兆しも考えられるので両者の比較は意味のあるものと思う。

毎年1万人をこえる若者が農学系の大学・学部に入学生し(表1-1, 表1-2), ほぼ同数の卒業生が新しい労働力として社会へ巣立ってゆく。昭和50年度の農学系の学生数は6万名近く、全学生の約3.5%を占める(表1-3)。これだけの学生の大学で受ける教育の内容と、学生が将来実際に携わる仕事(表1-4, 表1-5, 表1-6)との関連の有無・深淺は、彼等を受入れる社会

1) 山谷洋二：農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する意識の調査研究 「大学研究ノート」15号(昭和49年)

表1-1 農学系学部の数と入学定員（昭和50年4月現在）

	学 部 数				入 学 定 員			
	国 立	公 立	私 立	合 計	国 立	公 立	私 立	合 計
農 学 部	29	2	5	36	5,500	275	1,480	7,255
園 芸 学 部	1		1	2	180		100	280
獣医畜産学部			1	1			180	180
獣 医 学 部	1		1	2	40		120	160
畜 産 学 部	1		1	2	240		190	430
農 獣 医 学 部			1	1			1,200	1,200
酪 農 学 部			1	1			380	380
水 産 学 部	5		1	6	795		160	955
水 畜 産 学 部	1			1	90			90
合 計	38	2	12	52	6,845	275	3,810	10,930

他に筑波大学の第二学群の農林学類 入学定員120人  
 「大学資料」57-8合併号(1976)より作成

にとっても、学生自身にとっても重大な問題である。社会のさまざまな分野で働く卒業生にとって、大学で身につけた「一般教育」の内容や、専門の学問や技術が本当に役に立っているのかどうか。一口に、「大学は幅広くかつ高度の教養をそなえ、専門の分野での仕事を効果的・創造的に行い、資質や能力をもった人材を養成する」というが、農学系の学生にとってかかる教養とか資質・能力の実体はどんなものなのだろうか。一体農学とは何なのか。農学を何のために学ぶのか。技術科学としての農学をどのように教授し、どのように学ばばよいのか。農学の教育と研究を農業（広義）

表1-2 入 学 者 数

区 分	33年	43年	50年
農 学 部	5,232	7,676	9,008
園 芸 学 部	122	237	486
獣医畜産学部	133	281	322
獣 医 学 部	122	180	199
畜 産 学 部	109	314	465
農 獣 医 学 部	544	1,621	2,132
酪 農 学 部		382	522
水 産 学 部	471	724	994
水 畜 産 学 部	44	85	88
合 計	6,777	11,500	14,216

文部省、「学校基本調査」各年報より作成

表1-3 専攻別学生数とその比率（％）

区 分	33年		43年		50年	
	人 数	比率(%)	人 数	比率(%)	人 数	比率(%)
人文・社会科学	314,767	57.1	672,571	55.6	904,600	54.8
理 学・工 学	98,681	17.9	281,230	23.3	384,184	23.2
農 学	26,129	4.7	45,398	3.7	58,312	3.5
保 健	35,283	6.4	46,418	3.8	70,552	4.3
教 育	56,456	10.2	85,717	7.1	119,011	7.2
そ の 他	20,787	3.7	79,734	6.6	115,344	7.0
合 計	552,103	100.0	1,211,068	100.0	1,652,003	100.0

文部省、「学校基本調査」各年報より作成

の現場とどう関連させたらよいのか。教師にとっても、学生にとっても重要な問題が少なくない。

農業基本法が制定された翌年の昭和37年、文部省の技術教育協議会が「大学における農学教育の改善」案を発表し、農業近代化の推進力となる人材の養成を目指すべきであるとして、農学部の改組など若干の提案を行なった<sup>2)</sup>。その後多くの大学で農学系学部・学科の新設や改組<sup>3)</sup>が行なわれ学科別の学生数の比率が変動した。(表1-7)。大学院の修士課程も増設された。いくつかの農学系の学会では教育問題の検討が行なわれている<sup>5)</sup>。1960年代に始まる経済の高度成長政策の中で、農業基本法農政と総合農政はわが国の農業を大きく変貌させた。このような農業の大きな変貌と所謂「大学の大衆化」によって、農学系学部に入学者の学生数の勉強目的や資質も多様化している<sup>6)</sup>ので、これに対応するカリキュラムなどの改善のところが多数なされている<sup>7)</sup>。

そこで、本調査・研究は何よりも先ずわが国の農業の現実が学生の大学への入学動機と農業に関する意識にどのような影響を与えているかを知り、その中から農学教育のあり方と改善への方途を確かもうとして行ったものである。

表1-4 農学系学部の卒業生の産業別就職者数の推移

産 業 別	33年	43年	48年
総 数	4,484	6,522	8,599
農 業	418	465	537
林 業・狩 猟 業	99	139	71
漁 業・水産養殖業	87	113	187
鉱 業	7	7	22
建 設 業	104	375	483
製 造 業	1,316	2,144	2,877
卸 売 業・小 売 業	208	612	774
金 融 保 険 業	99	95	162
不 動 産 業	12	28	93
運 輸 通 信 業	43	61	98
電 気・ガ ス・水 道 業	6	8	15
サ ー ビ ス 業	939	1,233	1,487
公 務	900	965	1,692
そ の 他	246	277	101

文部省、「学校基本調査」各年報より作成

表1-5 農学系学部の卒業生の職業別就職者数の推移

職 業 別	33年	43年	48年
総 数	4,484	6,522	8,599
専門的技術的職業従事者	2,703	4,387	5,560
管理的職業従事者	36	52	172
事務従事者	614	841	1,150
販売従事者	144	696	1,030
農林業作業従事者	383	140	198
漁業作業従事者	52	4	8
採鉱・採石作業従事者	5	3	15
運輸・通信従事者	6	41	32
技能工・生産工程作業従事者	229	34	130
保安職業従事者	53	19	68
サービス職業従事者	43	54	73
上記以外のもの	216	251	163

文部省、「学校基本調査」各年報より作成

- 2) 文部省；技術教育協議会；大学における農学教育の改善（昭和37年）
- 3) 石塚喜明編；大学における農学教育—特にカリキュラムの立場から— 東大出版会（昭和46年）
- 4) 大学資料各号；「国公立大学・学部・学科等の新設について」
- 5) 例えば農芸化学会、農業土木学会、畜産学会など
- 6) 大学資料各号；「国公立大学の教育課程の改善に関する動きについて」
- 7) 各大学・学部の「学生便覧」など

表1-6 専門的技術的職業従事者の内訳

	33年	43年	48年
技 術 者	2,043	3,239	4,312
鉱山冶金技術者	1	3	4
機械技術者	23	147	98
電気技術者	2	8	3
化学技術者	277	647	684
土木建築技術者	192	446	647
農・林・蚕・水産技術者	1,336	1,301	2,235
上記以外の技術者	212	687	521
教 員	368	371	346
小学校の教員	11	12	9
中学校の教員	86	54	110
高等学校の教員	219	235	178
大学の教員	39	59	30
上記以外の学校の教員	13	11	19
医療保健技術者	107	368	197
医師・歯科医師・薬剤師	1	12	24
栄 養 士	0	5	24
上記以外の医療保健技術者	106	351	149
その他の専門的職業従事者	185	409	705
自然科学及び社会科学研究者	74	336	368
記者・編集者及び著述者	12	24	13
上記以外の専門的職業従事者	99	49	324

文部省、「学校基本調査」各年報より作成

表1-7 学科系列別入学者数とその比率(%)

区 分	33年		39年		43年		48年	
	人数	比率(%)	人数	比率(%)	人数	比率(%)	人数	比率(%)
農 学	2,186	33.5	2,171	24.5	2,620	21.9	2,918	20.6
農芸化学	853	13.1	1,348	15.2	2,163	18.1	2,346	16.6
農業工学	253	3.9	819	9.2	1,178	9.8	1,271	9.0
農業経済学	660	10.1	1,170	13.2	1,039	8.6	1,596	11.3
林 学	729	11.2	714	8.0	1,017	8.5	1,106	7.8
獣医畜産学	966	14.8	1,127	12.7	1,978	16.5	2,208	15.6
水 産 学	869	13.3	1,106	12.5	1,312	10.9	1,749	12.4
そ の 他	-	-	420	4.7	648	5.7	955	6.7
計	6,516	100.0	8,875	100.0	11,955	100.0	14,149	100.0

文部省、「学校基本調査」各年報より作成

## 2 調査の方法

### 2-1 調査時期 昭和51年5～6月の2ヶ月間

**2-2 調査対象と調査の実施** 既に昭和48年に名古屋以西の西日本地域の調査を行なっているので、今回は前回調査を行なわなかった主として東日本地域の4年制の国立の農学系大学・学部の新入学生全員を対象にして調査を行なった。東京大学と北海道大学では入学当初の学生は農学部には所属しないので調査の対象から除いた。調査方法は別掲(2-4)の調査票を著者が調査対象の大学・学部を持ってゆき、趣旨を説明して後、その大学の教官の協力をえて対象学生に調査票の記入をさせた。種々の事情で調査の行なえなかった3大学(宇都宮大学農学部、信州大学農学部、筑波大学農林学類)を除いて、調査を行ったのは表2-1に示す12の大学・学部である。これらの大学・学部の学科構成も併せて示してある。多少の問題点もあるが、以下の考察では類縁学科を一括した学科系列を学科として表現してある。

表2-2 調査票の回収率(大学別)

大学・学部	入学定員	実員	回収数	回収率
弘前大農	135(人)	134(人)	127(枚)	95(%)
岩手大農	210	226	168	74
東北大農	150	147	105	71
山形大農	155	148	122	82
新潟大農	155	144	62	43
茨城大農	115	115	110	96
千葉大園芸	180	185	65	35
東京農工大農	315	296	204	69
東京水産大	270	181	161	57
静岡大農	150	144	99	69
三重大学農	190	193	174	90
京都大農	300	288	46	16
合計	2,325(人)	2,301(人)	1,443(枚)	63(%)

**2-3 調査票の回収状況** 調査票の大学別の回収率は表2-2に示した通り、大学・学部によって幾分低い所もあったが、全体では63%であった。回収率の若干低い原因の一つは、農学部と教養部とが組織的、地理的に分離している大学が多いためである。表2-3は各学科別の回収率を示したものである。

表2-3 調査票の回収率(学科別)

学 科	入学定員	実員	回収数	回収率
農 学	525(人)	521(人)	342(枚)	66(%)
林 学	350	348	187	54
農芸化学	430	425	269	63
農業工学	345	342	242	71
畜産学	145	144	93	65
獣医学	65	71	50	70
水産学	325	336	184	55
環境学	90	91	54	59
農業経済学	50	49	22	45

**2-4 調査票** 用いた調査票を表2-4に示した。

**2-5 結果の分析** 調査票は学科別に集計して、全体と学生の出身家庭の職業別(農家と非農家)、所属学科別、農業高校出身者の区分で結果の分析、検討を行なった。



表 2-1-1 調査校の学科（コース）構成

大学・学部	系									
	学					科				
	農	林	園芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業経済学	
弘前大	農学	林学	園芸化学	農業工学						農業経済学
岩手大	農芸学	林学	農芸化学	農業土木学	畜産学	獣医学				
山形大	農芸学	林学	農芸化学	農業機械学						
東北大	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学		水産学			
新潟大	農学	林学	食糧化学	農業工学	畜産学			環境緑地学		
茨城大	農学	造園学	農芸化学	農業工学	畜産学					
千葉大	園芸学	造園学	農芸化学	農業工学	畜産学					
東京農工大	農業生産管理学	林産学	農芸化学	農業生産工学		獣医学		環境保護学		
東京水産大	蚕糸学	林産学					漁業生産学			
	植物防疫学						漁業生産工学			
							食品生産化学			
							増殖学			
							食品工学			
							海洋環境工学			
静岡大	農学	林学	農芸化学	農業土木学						農業経済学
	園芸学	林産学	農芸化学	農業機械学						
三重大	農学	林産学	農芸化学	農業工学	畜産学					農林経済学
		林産学	農芸化学	農業工学			水産学			
京都大	農林生物学	林産工学	農芸化学	農業工学	畜産学					
	生物学		食品工学							

表2-4

## 調査票

## 農学系学部新入学生の意識調査

昭和51年5～6月

この調査は、農学系学部新入学生の進路決定の状況と、農業に関する意識をしらべて、今後の農学教育の改善に役立てようとして行なうものです。調査の結果はこの目的以外に利用することはありませんから、正直にありのままを回答して下さい。諸君の御協力をおねがいます。

特別の指示のない限り、最も適当と思う事項の数字を○でかこみ、( )の中には必要な事項を記入して下さい。

- F 1. 学科 ( )
- F 2. 性別 1.男性 2.女性
- F 3. 出身高校 1.普通科(理数科を含む) 2.農業科 3.水産科 4.その他( )
- F 4. 出身地域 1.農漁村部 2.都市部
- F 5. 家の職業 1.農林漁業(専業) 4.農林漁業関連(農協,肥料,飼料,農機具,農薬など)  
2. " (一種兼業 農業が主) 5.食品の製造加工  
3. " (二種兼業 農業が従) 6.その他( )
- F 6. 高校当時あなたの好きだった科目(3つ以内を選ぶこと)  
1.生物 2.化学 3.物理 4.地学 5.数学 6.国語 7.英語 8.社会
- F 7. 高校当時あなたの嫌いだった科目(3つ以内を選ぶこと)  
1.生物 2.化学 3.物理 4.地学 5.数学 6.国語 7.英語 8.社会
- F 8. 高校当時、農(漁)業の授業がありましたか  
1.全然なかった 4.農業の科目があった  
2.少し教わったがほとんどおぼえていない 5.その他( )  
3.技術の中で教わった
- Q 1. 現在の学科を選んだ主な理由は(3つ以内を選ぶこと)  
1.農林業がすき 6.海山や自然がすき 11.第一志望に入れなかったから  
2.漁業がすき 7.その職業に魅力がある 12.家の職業の都合で  
3.生物学がすき 8.就職に心配がない 13.親,兄弟,知人などのすすめ  
4.化学がすき 9.高校や予備校の進学指導 14.通学に都合がよい  
5.動物,植物がすき 10.入学しやすい 15.その他( )
- Q 2. あなたが希望する将来の職業は(1つだけ)  
1.農林業に従事 5.公務員 9.造園,公園  
2.漁業に従事 6.教員 10.その他( )  
3.農林漁業関連の仕事 7.研究 11.わからない  
4.食品の製造・加工 8.獣医師
- Q 3. 現在のあなたの専攻はあなたの将来の志望に  
1.非常にならなっている 2.かなりかなっている 3.あまりかなっていない 4.全然かなっていない
- Q 4. もし可能なら、今からでも専攻をかえる希望がありますか  
1.是非移りたい 2.できれば移りたい 3.いまの専攻でよい 4.いまの専攻を是非つづけたい
- Q 5. あなたは、自分の専攻について、どれだけ知っていますか  
1.よく知っている 2.大体知っている 3.あまり知らない 4.全然知らない

うらにもあります

Q 6. あなたがこの大学に最も期待するものは(1つだけ)

- |                          |                             |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1. 就職のための専門的な知識や技術を身につける | 5 大学生活をエンジョイする(サークル, クラブなど) |
| 2. 自然科学の学問的素養を身につける      | 6 その他( )                    |
| 3. 教養を高め人間的に成長する         | 7 わからない                     |
| 4. 教員や友人との人間的な接触をうる      |                             |

Q 7. この学部の学生としてあなたの最も関心の強いものは(1つだけ)

- |                       |                     |
|-----------------------|---------------------|
| 1 産業としての農(漁)業         | 6 農(漁)村社会, 農(漁)家の生活 |
| 2 生物学, 化学, 物理学などの自然科学 | 7 公害と環境問題           |
| 3 農学を実地に応用すること        | 8 一般教養の一つとして農学をみる   |
| 4 食糧問題の解決             | 9 その他( )            |
| 5 食品の加工, 貯蔵           |                     |

Q 8. あなたは農業に対してどのようなイメージをもっていますか(3つ以内)

- |             |                |                 |
|-------------|----------------|-----------------|
| 1. 大切だ      | 5 農業政策との関連深い   | 9 古く保守的, 因襲的である |
| 2. やり甲斐がある  | 6 大学を出なくてもやれる  | 10 不安定である       |
| 3. 人間らしい仕事  | 7 労働がきつい       | 11 とくにない        |
| 4. 自然とのふれ合い | 8 働らく割には収入が少ない | 12 その他( )       |

Q 9. 日本の農業の将来についてどう考えますか

- |           |              |           |
|-----------|--------------|-----------|
| 1. 将来性がある | 2. あまり将来性がない | 3. 将来性がない |
|-----------|--------------|-----------|

Q10. 日本は土地がせまく, 外国に安い食料が沢山あるから日本で農業をやる必要がないという人がいますが, あなたはどう考えますか

- |                  |                 |                     |
|------------------|-----------------|---------------------|
| 1. 日本で農業をやる必要がない | 2. 農業はある程度必要である | 3. 農業をやることは非常に必要である |
|------------------|-----------------|---------------------|

Q11. 日本農業の最も大きな問題点は次の何だと思いますか(2つ以内)

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 人口のわりに国土がせまく, 山も多い | 5 農薬, 化学肥料, 家畜の糞尿公害など |
| 2. 農業技術がおくれている        | 6 農家の経営規模が小さい         |
| 3. 不安定で確信のない農業政策      | 7 その他( )              |
| 4. 外国からの大量の農産物の輸入     |                       |

Q12. 日本の最近の農家の総戸数はどの位だと思えますか

- |           |           |           |             |           |
|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|
| (1) 250万戸 | (2) 500万戸 | (3) 750万戸 | (4) 1,000万戸 | (5) わからない |
|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|

Q13. 日本の最近の農業就業人口はどの位だと思えますか

- |           |           |           |             |           |
|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|
| (1) 400万人 | (2) 600万人 | (3) 800万人 | (4) 1,000万人 | (5) わからない |
|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|

Q14. 日本の最近の米の年間総収量はどの位だと思えますか

- |           |             |             |             |           |
|-----------|-------------|-------------|-------------|-----------|
| (1) 700万t | (2) 1,000万t | (3) 1,300万t | (4) 1,600万t | (5) わからない |
|-----------|-------------|-------------|-------------|-----------|

Q15. 日本の最近の米の10アールあたりの平均収量はどの位だと思えますか

- |           |           |           |             |           |
|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|
| (1) 250Kg | (2) 500Kg | (3) 750Kg | (4) 1,000Kg | (5) わからない |
|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|

Q16. 日本の食糧の全体の自給率はどの位だと思えますか

- |         |         |         |         |           |
|---------|---------|---------|---------|-----------|
| (1) 30% | (2) 50% | (3) 70% | (4) 90% | (5) わからない |
|---------|---------|---------|---------|-----------|

Q17. 次の農産物の内, 最近の日本で自給率の非常に低いものはどれですか(2つ以上あげてもよい)

- |       |       |       |        |           |       |
|-------|-------|-------|--------|-----------|-------|
| 1. 米  | 2. 小麦 | 3. 大麦 | 4. 大豆  | 5. 飼料用穀物  | 6. 野菜 |
| 7. 果物 | 8. 牛乳 | 9. 肉類 | 10. 鶏卵 | 11. わからない |       |

以上です。ご協力 どうもありがとうございました。

### 3 入学生の状態

**3-1 出身地域及び家の職業** 大学・学部別に学生の出身地域及び家の職業の分布の状況を表3-1に示した。調査した全学生の中で、農漁村部出身者は37%，都市部の出身者は63%，家の職業を農林漁業とする者は30%，農林漁業関連とする者は2%，食品の製造・加工が1%，その他が67%であった。農林漁業30%の内訳は専業13%，一種兼業8%，二種兼業9%であった。これは3年前に西日本地域で行なった調査結果（農漁村部出身者39%，都市部出身者61%，家の職業が農林漁業のもの22%，その他の職業78%）とも殆んど一致している。すなわち全国的にみて農学系学部への入学者の2/3近くが都市部の出身者であり、大半の者の家の職業が農漁業と無関係である。

比較的農漁村部の出身者が多く、家の職業を農漁業とする者の割合も高い大学・学部を農村型、比較的都市部の出身者が多く、家の職業が農漁業の他とする者の割合の多い大学・学部を都市型とすれば、農村型に入るのは弘前大農、岩手大農、山形大農、新潟大農、茨城大農、千葉大園芸、三重大農の7学部であり、これらの学部では専業農家の比率も高い。一方都市型に入るのは東北大農、東京農工大農、東京水産大、静岡大農、京都大農の5大学・学部である。

表3-1 学生の出身地域と家の職業（大学・学部別、%）

大学・学部	出身地域		家の職業					
	農漁村部	都市部	農林漁業			農林漁業関連	食品の製造加工	その他
			(専業)	(一種兼業)	(二種兼業)			
弘前大農	44	56	20	11	7	2	2	58
岩手大農	46	54	17	10	9	2	2	60
東北大農	26	74	13	10	8	2	1	66
山形大農	56	44	16	24	7	1	1	51
新潟大農	55	45	18	13	14	0	0	55
茨城大農	55	45	23	9	13	1	0	54
千葉大園芸	49	51	22	3	15	2	0	58
東京農工大農	23	77	7	3	9	1	1	79
東京水産大	12	88	2	2	4	2	3	87
静岡大農	34	66	13	4	9	3	1	70
三重大農	43	57	9	9	14	2	1	65
京都大農	20	80	11	2	9	4	2	72
全体	37	63	13	8	9	2	1	67

次に、学科別の学生について出身地域及び家の職業の分布（表3-2）をみると、農村型の学科は農学科、農業工学科、畜産学科、農業経済学科であり、都市型の学科は林学科、獣医学科、水産学科、環境学科であり、農芸化学科はこれらの中間になる。これも西日本の場合と同様の傾向である。

**3-2 学生の性別の分布** 学生の性別の分布を表3-3に示した。学生全体では男性が87%，女性が13%であって、3年前の西日本地域での調査結果の男性88%，女性12%と等しい。学科別では獣医学科の女性の比率が42%と著しく高く、農芸化学科と農学科がこれに次ぎ西日本の場合と同様の結果である。

**3-3 出身高校の種類** 学生の出身高校の分布を表3-4に示した。高校の普通科（理数科

表 3-2 学生の出身地域と家の職業（学科別，％）

学 科	出身地域		家 の 職 業					
	農漁村部	都市部	農 林 漁 業			農林漁業 関 連	食 品 の 製 造 加 工	そ の 他
			（ 専 業 ）	（ 一 種 兼 業 ）	（ 二 種 兼 業 ）			
農 学	51	49	24	12	6	1	1	56
林 学	27	73	7	6	10	1	2	74
農芸化学	38	62	12	8	11	2	1	66
農業工学	47	53	12	14	12	2	1	59
畜産学	39	61	17	6	13	0	3	61
獣医学	22	78	12	4	4	0	2	78
水産学	11	89	4	2	3	3	3	85
環境学	31	69	0	2	22	0	2	74
農業経済学	55	45	14	9	36	0	14	27

を含む)の出身者が全体の97%を占め、農業科の出身者は2%にすぎない。しかも農業科、水産科出身者の殆んどが推薦入学の学生である。西日本の学部でも同様である。高校の農業科出身者の比較的が多い学科は農学科と畜産学科である。

次に農業高校の出身者の家の職業の分布を示したのが表3-5である。家の職業を農業とする者が9割を占め、専業農家も6割に達しており、普通科出身者の家の職業の分布と非常に異なるパターンを示している。

また、高校当時に農業の授業を受けたことがあるかどうかをみると(表3-6)、少しでも農業

表 3-3 学生の性別（％）

学 科	男 性	女 性
農 学	85	15
林 学	95	5
農芸化学	76	24
農業工学	98	2
畜産学	90	10
獣医学	58	42
水産学	90	10
環境学	89	11
農業経済学	100	0
全 体	87	13

表 3-4 学生の出身高校の種類（％）

学 科	普通科	農業科	水産科	その他
農 学	93	6	0	1
林 学	99	0	0	1
農芸化学	99	0	0	1
農業工学	100	0	0	0
畜産学	91	9	0	0
獣医学	100	0	0	0
水産学	98	0	1	1
環境学	100	0	0	0
農業経済学	95	0	0	5
全 体	97	2	0	1

表 3-5 農業高校出身者の家の職業（％）

農林漁業(専業)	59
〃 (一種兼業)	22
〃 (二種兼業)	8
農林漁業関連	0
食品の製造加工	0
その他	11
合 計	100

。調査学部の内推せん入学を行っているもの  
弘前大(園芸)、岩手大(畜産)、山形大(園芸)  
茨城大(畜産)、千葉大(園芸)、東京農工大  
(蚕糸生物)、三重大(林産)

表 3-6 高校当時、農(漁)業の授業の有無（％）

全然なかった	97
少し教わったがほとんどおぼえていない	1
技術の中で教わった	0
農業の科目があった	2
合 計	100

の授業のあったとする者は3%にすぎず、97%の学生は農業の授業が全然なかったとしている。

のちに述べるように農業科出身者の農業に対する意識の高いことから、以上の結果は農業科出身者の推薦入学制度の是非とも深い関わりがある。

### 3-4 教科に対する好悪感 表3-7は各学科別に学生の高校当時の科目に対する好き嫌い

表3-7 学生の高校当時の教科に対する好悪感(%)

学科	全体	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業経済学
高校当時あなたの好きだった科目(3つ以内を選ぶこと)										
生物	43	56	47	47	19	51	36	40	48	41
化学	39	30	36	62	36	30	28	37	44	32
物理	25	18	24	16	43	12	24	31	32	41
地学	12	14	16	7	10	11	4	15	9	9
数学	36	35	25	36	47	31	34	44	37	36
国語	16	18	20	16	12	20	26	11	13	18
英語	20	19	16	20	24	17	30	20	30	18
社会	39	41	46	36	42	51	36	22	43	41
高校当時あなたの嫌いだった科目(3つ以内を選ぶこと)										
生物	10	6	8	6	15	8	8	6	17	18
化学	17	19	19	8	24	14	14	20	9	23
物理	35	44	39	37	21	39	34	32	35	27
地学	10	10	6	12	10	11	18	10	4	9
数学	20	20	27	21	17	22	30	19	11	9
国語	32	25	29	31	45	26	18	35	24	35
英語	39	41	41	40	43	43	30	32	33	27
社会	16	12	12	13	15	12	16	31	17	5

の状況を示したものである。学生全体をみると、好きな科目としてあげられたのは生物、化学、数学、社会であり、嫌いな科目としては物理、国語、英語があげられたが、当然のことながら学科毎に大きな相違が認められた。特に目立つのは、農芸化学科の学生の化学、農業工学科の学生の物理と数学、農学科の学生の生物に対する親近感である。農学系学部の学生が全体として生物、化学、数学、社会に関心が強いことは、広義の農学が生物の生産と、その生産物の人類への利用を目的としていて、社会との関連の深いことから当然のことであるが、上述の農学の目的からしても地学、国語、物理、英語など「嫌い」な科目の学力を十分伸ばす方向の教育を入学後に配慮する必要がある。学科毎の学生の科目に対する関心の相違は、学部全体を通じた共通基礎的な教科目を実施するさいに念頭におかなくてはならない事柄である。

## 4 学生の進学動機

4-1 現在の専攻を選んだ理由 農学系の学生が現在の学部・学科を選んだ理由を示すと表4-1のようになる。まず農学系学部へ自らの積極的希望によって入学して来る者は、「農林漁業が好き」の11%と「その職業に魅力がある」の24%を合せた35%、全体の約1/3である。一方自然や動植物、生物学に対する親近感を示す者が多く、広範な分野にわたる卒業後の職業の将来性と自分の適性との関連を理由にあげた者が少なくなかった。又、「農学部即ち農業学部ではない」という記述もみられた。

一方「入学しやすい」とか「第一志望に入れなかったから」を理由とする者が38%を占め、「高

表 4-1 学生が現在の専攻を選んだ理由（3つ以内，％）

進学動機	全体	学 科 別								
		農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業経済学
農林業がすき	10	15	11	7	11	20	6	2	4	18
漁業がすき	1	1	0	0	0	0	0	8	0	0
生物学がすき	25	33	22	30	6	26	26	28	30	27
化学がすき	12	4	7	43	1	5	2	8	4	0
動物、植物がすき	30	42	27	22	5	51	62	29	57	27
海山や自然がすき	40	42	63	33	22	32	28	52	76	36
その職業に魅力がある	24	23	18	22	30	18	48	19	24	32
就職に心配がない	5	1	1	9	10	0	12	7	0	5
高校や予備校の進学指導	3	1	5	2	7	4	0	0	0	9
入学しやすい	20	16	17	18	34	17	4	22	4	32
第一志望に入れなかったから	18	11	29	14	25	20	22	3	9	18
家の職業の都合で	7	14	1	4	8	4	2	3	0	14
親、兄弟、知人などのすすめ	4	3	2	6	8	2	4	3	0	14
通学に都合がよい	5	4	5	5	10	2	2	5	6	0
その他（ ）	4	3	4	3	5	2	4	8	4	9
回答なし	1	1	1	0	1	1	2	2	0	0

校や予備校の進学指導」や「親などのすすめ」を含めて、約半数の者が自己の適性や好みを二の次にして高校時代の成績や学力を理由に進路を決定していることがうかがわれる。

勿論、現在の専攻への進学理由を「第一志望に入れなかったから」とする者のすべてが、農学系の学部を第二志望としていた事にはならず、現在の専攻が学部内での第二志望だった者を当然含んでいると思われる。しかし3年前の西日本地域での調査結果をみると（表4-2）、農学系学部新入生の内、入学前に農学系学部を第一志望としていた者は40%しかおらず、一方理学、工学、医学などの理系学部を第一志望としていた者は50%をこえている。すなわち農学系学部の学生の過半数は自分の意志に反して農学系学部に入学してくることを示している。このことは日本の農業の不正常的な現状が強く高校生の意識を支配しているためと考えられるが、同じ理由で高校教師の進路指導のあり方にも大きな問題があると思われる。

次に学科別に学生の進路決定の理由をみると学科によってかなりの違いが認められた。「農林業がすき」を理由とする者の比率の比較的に高いのは農学科、畜産学科、農業経済学科の学生である。「生物学とか動植物、自然がすき」を理由とする者は農学科、林学科、畜産学科、獣医学科、水産学科、環境学科の学生に多い。「職業に対する魅力」を理由とする者は農業工学科、獣医学科、農業経済学科の学生に多い。「第一志望に入れなかったから」を理由とする者は林学科、農業工学科、畜産学科、獣医学科、農業経済学科の学生に多い。

その他の理由の中にはさらに、「工業に魅力がない」ことを理由にあげる者が少なくなく、高度経済成長の中での公害などの歪が高校生の意識に反映しているものと考えられる。「人間の多い所がきらい」、「変わったことがしたい」、「サラリーマンがきらい」、「のんびりしたい」、「理想や夢の実現」などを理由としてあげている者もこの系列に属するものとみなしてよからう。更に「家が農家だから」とか「作ることが好き」、「公務員になるのに都合がよい」などを理由としてあげている者も

表 4-2 学生が入学前に第一志望としていた学部

農水産学系	31%
獣医学	9
理学（生物学）	9
理学（その他）	9
工 学	20
医 歯 ・ 薬 学	13
そ の 他	6
無 回 答	3
合 計	100%

ある。3年前の西日本地域での調査結果と大差のない結果である。

**4-2 将来の進路希望** 農学系学生の卒業後の進路希望を示したのが表4-3である。全体では「公務員」を将来の職業として希望する者が24%、「研究」が23%と最も多くこの両方で全学生の約半数になる。農林漁業関連の仕事、農林業、食品の製造・加工、教員、獣医師、造園・公園などがこれに続いている。「わからない」とする者が18%もあることは、農学系学部への入学生のかなりの部分が確固とした目標をもたずに入学していることになり注目される。入学当初という時点ではある意味では当然とも考えられるが問題を含んでいるといえよう。

家の職業別にみると、農家出身者の内で農林業や農林業関連の仕事につきたいとする者の比率は37%で、非農家出身者の14%に較べて非常に高い値を示した。一方農家出身者では、「研究」を希望する者と「わからない」とする者の比率は非農家出身者の約半分である。

農業高校の出身者では農林業を志望する者が53%、農林漁業関連の仕事我希望する者が22%と更に高率である。「わからない」とする者は4%しかいない。

次に、学科別の学生について卒業後の進路希望を示したのが表4-4である。農学科の学生では研究と公務員志望がそれぞれ23%と22%で最も多く、次いで「農林業に従事」の17%と「農林漁業関連の仕事」の9%となっている。その他教員や造園・公園、園芸、植物園、検疫、昆虫の研究、品種改良、農業改良普及員などの志望がみられる。林学科の学生では、公務員志望の28%、研究の19%が高率であり、これに造園・公園の10%と「農林漁業関連の仕事」の10%が次いでいる。農芸化学科の学生では研究の36%、公務員の19%が高率で、これに食品の製造・加工の11%

表4-3 学生の卒業後の進路希望(%)

進路希望	全体	農家出身者	非農家出身者	農業高校出身者
農林業に従事	9	20	6	53
漁業に従事	0	1	0	0
農林漁業関連の仕事	10	17	8	22
食品の製造・加工	4	3	4	0
公務員	24	23	24	7
教員	3	4	3	7
研究	23	12	26	7
獣医師	3	3	3	0
造園・公園	3	4	3	0
その他	3	2	3	0
わからない	18	11	20	4
合計	100	100	100	100

○農家出身者→家の職業が農林業(専業又は一種兼業)のもの、二種兼業農家は非農家として扱った。

表4-4 学科別学生の卒業後の進路希望(%)

学 科	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業経済学
農林業に従事	17	5	4	7	20	4	2	1	13
漁業に従事	0	0	0	0	1	0	3	0	0
農林漁業関連の仕事	9	10	8	16	13	4	12	2	18
食品の製造・加工	0	0	11	0	4	0	11	0	5
公務員	22	28	19	37	18	8	15	22	45
教員	4	2	2	5	3	0	2	7	0
研究	23	19	36	10	13	8	28	35	9
獣医師	0	0	1	0	8	56	1	0	0
造園・公園	6	10	1	4	0	0	0	19	0
その他	2	2	1	4	0	4	6	5	5
わからない	17	24	17	17	20	16	20	9	5
合計	100	100	100	100	100	100	100	100	100



がつづく。「農林漁業関連の仕事」、「農林業に従事」の他に食品衛生関係、微生物関係、醸造、製菓、教員などを志望する者もある。農業工学科の学生では公務員志望の37%を最高に、「農林漁業関連の仕事」の16%、次いで研究の10%、「農林業に従事」の7%が多く、その他教員や造園・公園、土地造成、農地の開発、機械の設計などの技術者を志望する者がある。畜産学科の学生では「農林業に従事」の20%と公務員志望の18%が多く、これに「農林漁業関連の仕事」の13%、研究の13%、獣医師の8%が多い方である。その他食品の製造・加工や教員、農業改良普及員などを志望する者もある。獣医学科の学生では獣医師志望者が56%と圧倒的に高率であり、研究の8%、公務員の8%がこれにつづく。水産学科の学生では研究志望が28%と高率を示し、これに公務員の15%、「農林漁業関連の仕事」の12%、食品の製造・加工の11%がつづく。その他「漁業に従事」とか海運業や航海士を志望する者もある。環境学科の学生では研究の35%と公務員の22%、造園・公園の19%が高率である。農業経済学科の学生では公務員志望が45%と圧倒的に高率で、これに「農林漁業関連の仕事」の18%、「農林業に従事」の13%、研究の9%などとなっている。

その他、公害とか環境保全・保護関係の仕事につきたいとか、資源や生態系に関係する仕事をしたいとする者、自然関係の出版・ジャーナリスト、新聞・放送局などのマスコミ関係の仕事を志望する者が全学科にみられた。一方農学科や農業工学科、水産学科などの学生を中心に海外の農業技術指導や砂漠の開拓などを志望する者がある。又将来とも職業につきたくないとする者も僅かながらみられた。以上にみられる様に農学系学生の将来の希望する職業分野は極めて広範であり、今後の農学教育の改革を進めてゆく上で念頭におくべき要素と思われる。

4-3 現在の専攻に対する適合感 表4-5は農学系学部の入学当初の学生が現在の専攻に対してどれだけ適合感をもっているかを示したものである。全体では7割近い学生が、現在の専攻

表4-5 現在の専攻に対する適合感(%)

学 科	全体	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業経済学
現在のあなたの専攻はあなたの将来の志望に										
非常にななっている	12	14	10	11	6	10	34	17	17	5
かなりかななっている	54	54	49	62	52	46	46	47	56	63
あまりかななっていない	25	22	32	19	32	31	12	25	22	27
全然かななっていない	5	5	5	4	7	7	8	7	2	0
回答なし	4	5	4	4	3	6	0	4	3	5
合 計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
もし可能なら、今からでも専攻をかえる希望がありますか										
是非移りたい	7	8	7	3	10	7	2	10	0	4
できれば移りたい	19	15	24	15	20	32	20	21	15	18
いまの専攻でよい	54	59	49	60	57	49	46	47	52	55
いまの専攻を是非続けたい	17	15	16	19	11	12	32	18	30	23
回答なし	3	3	4	3	2	0	0	4	3	0
合 計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
あなたは、自分の専攻について、どれだけ知っていますか										
よく知っている	5	13	6	1	1	1	0	5	4	4
大体知っている	37	31	39	46	31	38	42	39	33	23
あまり知らない	51	49	49	50	57	49	46	46	56	73
全然知らない	6	6	6	2	10	12	10	8	5	0
回答なし	1	1	0	1	1	0	2	2	2	0
合 計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

が自分の将来の志望にかなっているとし、今の専攻をつづけたいとしている。一方3割近くの者が現在の専攻は自分の将来の志望に合わないとし、可能なら、これからでも他の専攻へ移りたいと答えている。また自分の専攻について内容を「よく知っている」、「大体知っている」とする者は4割しかなく、6割近くの者は自分の専攻について「知らない」と答えている。

以上のことは、前述のように農学系学部入学者の約半数が自己の適性や好みを二の次にして高校時代の成績や学力を理由に進路を決定していること、そうして二次志望の者が少なくないことと対応している。このことは以後の学生の勉学意欲に大きな影響を与えているので、教員の側で専攻の内容や社会的意義などを周知させるなどして勉学意欲をつけるための格別の配慮をするとか、あるいは一定の制約内で学生の専攻の移動を可能にするために、カリキュラムの編成や学科組織の上で柔軟性をもたせる必要があると思われる。

次に学科別の学生について専攻に対する適合感をみると、現在の専攻が将来の志望に「かなっている」とする者の比較的に多い学科は獣医学科(80%)、農芸化学科(73%)、環境学科(73%)であり、一方畜産学科、林学科、農業工学科では4割近くの学生が自分の将来の志望に「合わない」としている。また林学科、農業工学科、畜産学科、水産学科では3割以上の学生が現在の専攻をかえる希望をもっている。一方農芸化学科、獣医学科、環境学科、農業経済学科の学生は8割近くが現在の専攻を続けたいとしている。

自分の専攻について内容を「知っている」とする者の比較的に多い学科は農学科、林学科、農芸化学科、獣医学科、水産学科であり、一方、余り知られていないのは農業工学科、畜産学科、環境学科、農業経済学科である。

**4-4 大学に対する期待** 学生の大学に入る目的、大学というものをどのように考えているのかを知るために、学生が大学に何を期待しているのかを調べた結果が表4-6である。「就職のための専門的な知識や技術を身につけること」を期待する者が25%、「自然科学の学問的素養を身につける」とする者が24%と両者で約半数を占める。これに「教養を高め人間的に成長する」の21%、「人間的な接触をうる」の11%がつづく、

表4-6 学生の大学に対する期待(%)

大学に対する期待	全体	農業高校出身者
就職のための専門的な知識や技術を身につける	25	18
自然科学の学問的素養を身につける	24	30
教養を高め	21	30
人間的に成長する	11	11
教師や友人との人間的な接触をうる	9	0
大学生生活をエンジョイする(サークル、クラブなど)	3	4
その他	7	7
わからない		
合計	100	100

表4-7 学科別学生の大学に対する期待(%)

学 科	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業経済学
就職のための専門的な知識や技術を身につける	25	21	20	30	19	44	30	19	23
自然科学の学問的素養を見につける	27	21	29	9	24	18	30	52	18
教養を高め	23	24	22	21	24	20	9	15	27
人間的に成長する	10	10	12	13	16	10	8	3	5
教師や友人との人間的な接触をうる	7	12	8	14	11	4	8	2	18
大学生生活をエンジョイする(サークル、クラブなど)	1	3	2	2	0	4	5	3	5
その他	7	9	7	11	6	4	10	6	4
わからない									
合計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

大学生生活をエンジョイしようとする者が9%ある。一方農業高校出身者では専門的な知識や技術を求める者(18%)よりは、自然科学の学問的素養(30%)や教養を高め人間的に成長する(30%)ことを求める者の方が多い。

次に学生の大学に対する期待を学科別にみると(表4-7)、就職のための専門的な知識や技術に対する期待は獣医学科や農業工学科、水産学科の学生に強く、自然科学の学問的素養に対する期待は環境学科、水産学科、農芸化学科、農学科の学生に強い。一方農業経済学科の学生では教養を高め人間的に成長することを期待する者が比較的多い。

以上の他、大学に入る目的として比較的に多いのは、「現代社会に対応できる人間になる」とか、「専門にとらわれず自由に広く勉強したい」、「現実や社会をありのままとらえる」という一方、逃避とか休養、就職の手段、卒業証書をうるためなどがあげられている。大学に何も期待しないとする者も僅かながらいる。

大学に対する要望としては、「独自の何かを持った特色のある大学」、「自由な勉学のできること」、「人文・社会系統の講義を軽視しないこと」などがあげられた。

**4-5 農学系の学生として最も関心の深い分野** 農学系の学生が自分の学部の役割をどのようになっているかを知るために、農学系学部の学生として最も関心の深い分野を調べたのが表4-8である。全体では自然科学をあげた者が22%と最も多く、ついで公害・環境問題の21%、農学の応用19%、食糧問題11%、産業としての農業10%である。農家出身者は農学の実地への応用や産業と

表4-8 農学系の学生として最も関心の深い分野(%)

学生の関心	全体	農家出身者	非農家出身者	農業高校出身者
産業としての農(漁)業	10	20	8	36
生物学, 化学, 物理学 などの自然科学	22	15	24	14
農学を実地に 応用すること	19	31	16	44
食糧問題の解決	11	6	12	3
食品の加工, 貯蔵	4	2	4	0
農(漁)村社会, 農(漁)家の生活	3	5	3	0
公害・環境問題	21	13	23	0
一般教養の一つ として農学をみる	3	2	3	3
その他	4	3	4	0
回答なし	3	3	3	0
合計	100	100	100	100

表4-9 農学系の学生として最も関心の深い分野(学科別, %)

学 科	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業経済学
産業としての農(漁)業	9	11	3	12	17	16	13	0	14
生物学, 化学, 物理学 などの自然科学	22	21	27	16	31	26	22	8	18
農学を実地に 応用すること	33	12	11	30	20	10	2	2	0
食糧問題の解決	9	7	17	11	11	10	15	2	37
食品の加工, 貯蔵	0	1	12	1	5	0	9	0	0
農(漁)村社会, 農(漁)家の生活	3	4	2	3	3	14	5	0	14
公害・環境問題	15	37	20	15	7	10	20	84	14
一般教養の一つ として農学をみる	4	1	2	5	2	0	1	0	9
その他	4	4	2	4	3	6	8	0	4
回答なし	1	2	4	3	1	8	5	4	0
合計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

しての農業に関心が高く、他方非農家出身者では自然科学や公害・環境問題に関心が高い。農業高校出身者では農学の実地への応用と産業としての農業への関心が著しく高い。

次に学科別の学生について最も関心の深い分野を示したのが表4-9である。産業としての農業や食糧問題、農学の実地への応用など伝統的な農学の分野に関心の深いのは農学科、農業工学科、畜産学科、獣医学科、農業経済学科の学生であるが、それでもその比率は50～55%程度である。一方環境学科の学生では84%の者が公害・環境問題に関心を示し、林学科の学生も公害・環境問題に関心が深い。

このように農学系の学生として産業としての農業や農学を実地に应用すること、食糧問題の解決や農、漁村社会に関心を持つのは勿論であるが、多数の学生が自然科学の勉学や公害・環境問題に関心の深いことは、農学教育の中でこれらの学生の多面的な関心にみあった配慮が今後必要になると思われる。

さらに、人間と自然との関係、自然科学と社会との結びつき、現代社会における農業の役割、農業の本質、人口と食糧、開発途上国の農業、健康と食生活、農業労働の価値、農業の工業化などの問題に学生の関心のあることが示された。

## 5 農業に関する意識

5-1 農業に対するイメージ 農学系学部の新入生の農業に対するイメージを示したのが表5-1である。農業を「大切だ」とする者が54%で一番多く、「自然とのふれ合い」をあげる者が37%でこれに次ぐ。「やり甲斐がある」、「人間らしい仕事である」という積極的なイメージのある一方、

「働く割には収入が少ない」、「労働がきつい」、「不安定である」、「古く保守的・因襲的である」、「大学を出なくてもやれる」などという消極的なイメージをあげる者も多い。また農業と農政との深い関連も15%の者があげている。「とくにない」とする者が6%もある。

次に農家出身者についてみると、「働く割には収入が少ない」とする者が43%もあり、「大切だ」とする者の45%に匹敵している。農業に携わる者の体験から出た実感だろう。「労働がきつい」とする者も非農家出身者に較べて高率である。「自然とのふれ合い」をあげる者は家の職業にかかわらず35%位の高率である。一方農業高校出身者は農家出身者であっても、「働く割には収入が少ない」とか「労働がきつい」とする者の比率がそれ程高くなく、逆に「自然とのふれ合い」とか「人間らしい仕事」、「やり甲斐がある」をあげる者の方が多く、農業に対して明るいイメージを持っていることがわかる。

農業に対するイメージを学科別の学生について示したのが表5-2である。農業を「大切だ」とする者の比率は環境学科と農業経済学科の学生で比較的に高い。「やり甲斐がある」とする者の比率は農学科と畜産学科、獣医学科の学生で高い。「人間らしい仕事」とする者は環境学科の学生に多い。

表5-1 農業に対するイメージ (3つ以内、%)

イメー ジ	全 体	農 家 出 身 者	非農家 出 身 者	農業高校 出 身 者
大 切 だ	54	45	56	48
やり甲斐がある	15	17	15	30
人間らしい仕事	19	20	19	33
自然とのふれ合い	37	34	38	48
農業政策との関連深い	15	13	15	15
大学を出なくてもやれる	8	10	8	15
労働がきつい	17	23	16	19
働く割には収入が少ない	27	43	23	26
古く保守的、因襲的である	10	11	10	4
不安定である	18	17	18	11
そ の 他	2	1	2	4
とくにない	6	5	6	0

表 5-2 学科別学生の農業に対するイメージ (3つ以内, %)

学 科 別	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業経済学
大切だ	54	55	55	47	54	54	59	67	68
やり甲斐がある	21	13	13	15	18	18	8	13	14
人間らしい仕事	19	22	21	17	20	18	15	26	14
自然とのふれ合い	37	50	39	32	44	18	27	33	36
農業政策との関連深い	18	17	13	10	14	16	14	17	27
大学を出なくてもやれる	10	8	6	8	10	12	9	0	0
労働がきつい	16	15	17	22	18	24	14	6	18
働く割には収入が少ない	31	18	26	34	29	38	17	19	36
古く保守的, 因襲的である	9	10	10	12	10	8	10	2	27
不安定である	19	13	20	18	23	16	22	11	18
その他	1	1	3	0	1	2	3	4	0
とくにない	4	8	6	5	3	4	11	6	0

林学科と畜産学科の学生は「自然とのふれ合い」を強調している。「農政との関連が深い」とする者は農業経済学科の学生に多い。「労働がきつい」とか「働く割には収入が少ない」とする者は農学科, 農業工学科, 畜産学科, 獣医学科, 農業経済学科の学生に多い。農業を「古く保守的・因襲的なもの」とみる者は農業経済学科の学生に多い。「不安定だ」とする者は畜産学科と水産学科の学生に多い。

次に農業に対するイメージとして選択肢にあげた以外のもので自由に記述されているものをみると積極的なイメージと消極的なイメージに大きく分類できる。積極的なイメージとしてあげられたのは、「国民の食を支えるもの」、「社会に不可欠」、「あらゆる産業の基本」、「これからの産業」、「将来の発展可能性の大きな産業」、「見なおすべき産業」などである。特色として農業は「自然との戦い」、「土が資本」、「すべての学問の応用」などと考えられている。

一方, 消極的なイメージとしては、「労働条件が悪く所得も少ない」、「労働時間が生活の大半を占める」、「どろくさい」、「無計画」、「社会的に軽視されている」、「差別されている」、「いじけている」、「日本で亡びる産業」などである。

以上に見るように, 農学系学部の学生の大半は農業は大切であり, やり甲斐のある職業であると考えている一方, 現実の日本農業の困難な状況を敏感にうけとめているといえよう。これらの結果は3年前の西日本での調査結果と大差がない。学生の記述の中には勿論誤解や明瞭なあやまりもあるが, われわれ教師は学生の農業に対するこのような意識状況を十分にわきまえ, 彼等の農業に対する認識を正しく発展させる方向

表 5-3 学生の指摘する日本農業の問題点 (2つ以内, %)

問 題 点	全 体	農 家 出身者	非農家 出身者	農業高校 出身者
人口の割に国土が狭く, 山も多い	32	32	32	48
農業技術がおくれている	2	2	2	0
不安定で確信のない 農業政策	54	58	53	56
外国からの大量の 農産物の輸入	22	19	23	19
農業, 化学肥料, 家畜の糞尿公害など	19	15	20	11
農家の経営規模が小さい	40	46	39	56
そ の 他	3	3	3	0
回 答 な し	1	2	1	0

5-2 学生の指摘する日本農業の問題点 ではこのような日本農業の困難をもたらしている原因は何なのだろうか。学生が日本農業の問題点として指摘するのは次のようなものである(表5-3)。全体では半数以上の学生が「不安定で確信のない農業政策」がその原因であるとし, 次いで4

表 5 - 4 学科別学生の指摘する日本農業の問題点（2つ以内，%）

学 科	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業経済学
人口のわりに国土がせまく、山も多い	30	26	31	42	36	22	31	28	32
農業技術がおくれている	2	1	2	3	0	0	3	4	0
不安定で確信のない農業政策	63	56	48	43	53	58	53	61	59
外国からの大量の農産物の輸入	18	26	22	25	27	40	17	15	23
農薬、化学肥料、家畜の糞尿公害など	20	25	28	13	13	6	26	33	18
農家の経営規模が小さい	42	37	40	46	44	28	33	28	50
その他	2	3	3	3	2	8	4	6	9
回答なし	2	3	2	0	1	2	3	2	0

割の者が「農家の経営規模の小さい」ことを、3割の者が「人口のわりに国土がせまく、山も多い」ことをあげ、2割近くが「外国からの大量の農産物の輸入」、「農薬、化学肥料、家畜の糞尿公害など」がその原因であるとしている。農業技術のおくれを指摘する者は殆んどいない。

次に家の職業別にみると農家の出身者は非農家出身者に比べて農政に問題ありとする者が幾分多く、農家の経営規模の小さいことを指摘する者も多い。農業経営を肌で体験している者の実感であろう。農業高校出身者では農政と経営規模の小さいことの他に国土がせまく、山の多いことを問題として指摘する者が多い。

日本農業の問題点を学科別の学生について示したのが表5-4である。農政に問題ありとする者は農学科、林学科、獣医学科、環境学科、農業経済学科の学生に多い。経営規模の小さいことを指摘する者は農業経済学科、農学科、農業工学科、畜産学科の学生に多い。農業工学科と畜産学科の学生は国土がせまく、山も多いことを指摘している。外国からの大量の農産物の輸入を問題視しているのは獣医学科の学生に多い。農薬、化学肥料、家畜の糞尿公害などを問題にしているのは環境学科、農芸化学科、水産学科、林学科の学生に多い。

その他の問題点を指摘した者は全体の学生の3%いるが、自由に記述されたものをみると大きく、(1)国の政策の問題、(2)国民一般の農業に対する認識の欠如、(3)農民の意識の三つに分けることができる。

(1)の例としては、「工業中心の政策」、「大資本優先の考え」、「農地の開発利用のおくれ」、「農業の近代化に設備・費用がかかりすぎる」、「工業拡大による農地の取上げ」、「悪い農業立地」、「ゴルフ場の造成」、「農耕地の酷使で土地がだめになった」などである。

(2)の例としては、「今の世の中は利潤の追及が第一」、「他産業からの理解の不足」、「社会の農業軽視の風潮」、「日本人の農業に対する考が悪い」、「農業の地位が低い」、「農業に対する無関心と偏見」などである。

(3)の例としては、「農民意識の不足」、「農業者のモラル」、「農民が本質を見失いつつある」、「農業に若者が誇りを持ってない」、「農民教育の不足」、「農民の知識不足」、「農業団体が弱い」などである。

**5-3 日本農業の将来性と必要性** 日本の農業に将来性があるのか、日本で農業をやる必要があるのかどうかについて学生の考えを示したのが表5-5である。

まず日本の農業の将来性については、全体の学生の74%が「あまり将来性がない」或は「将来性がない」と答え、「将来性がある」とする者は24%しかいない。中には「このままではあまり将来

表5-5 日本農業の将来性と必要性 (%)

	全 体	農家出身者	非農家出身者	農業高校出身者
日本の農業の将来性についてどう考えますか				
将来性がある	24	28	23	78
あまり将来性がない	56	52	57	18
将来性がない	18	17	18	4
回答なし	22	3	2	0
合 計	100	100	100	100
日本は土地がせまく、外国に安い食糧が沢山あるから 日本で農業をやる必要がないという人がいますが、あなたはどうか考えますか				
日本で農業をやる必要がない	2	2	2	4
農業はある程度必要である	20	17	21	7
農業をやることは非常に必要である	77	80	76	89
回 答 な し	1	1	1	0
合 計	100	100	100	100

性がない」と限定的な言辭を附加している者も少なくなかったが、この数字は3年前の西日本地域での調査結果と非常によく一致しており、農学系学生の約3/4が日本の農業の将来に不安を持っていることになる。この数字は家の職業が農業の者についても非農家出身者についても余り差がないが、一方農業高校出身者では「将来性がある」とする者が78%と非常に高率を示して注目される。

また日本農業の必要性については、「日本は土地がせまく、外国に安い食糧が沢山あるから日本で農業をやる必要がないという人がいますが」という幾分誘導的な問い方をしたが、日本農業の必要性を認めないものは僅か2%しかいない。ある程度の必要性を認める者が20%、非常に必要だとする者が77%ある。家の職業が農家の者も非農家の者でも大差がないが、農業高校の出身者では9割の者が日本の農業は非常に必要であるとしている。西日本地域の調査でも同じ結果がえられている。このことは圧倒的に多数の学生が日本で農業をやる必要を認めながら、その将来には不安を持っていることを示している。

学科別に学生の日本農業の将来性と必要性についての意識を示したのが表5-6である。日本農

表5-6 日本農業の将来性と必要性 (学科別, %)

学 科 別	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業経済学
日本の農業の将来についてどう考えますか									
将来性がある	27	25	20	30	29	20	17	11	27
あまり将来性がない	54	57	54	55	56	62	63	58	55
将来性がない	17	17	23	14	15	18	17	21	18
回答なし	2	1	3	1	0	0	0	10	0
合 計	100	100	100	100	100	100	100	100	100
日本は土地がせまく、外国に安い食糧が沢山あるから 日本で農業をやる必要がないという人がいますが、あなたはどうか考えますか									
日本で農業をやる必要はない	2	1	2	1	2	4	2	0	0
農業はある程度必要である	16	13	27	25	17	10	22	13	14
農業をやることは非常に必要である	82	85	70	73	80	86	74	83	86
回 答 な し	0	1	1	1	1	0	2	4	0
合 計	100	100	100	100	100	100	100	100	100

業の将来性について最も悲観的なのは環境学科，水産学科，獣医学科，農芸化学科の学生であり，農業の必要性を痛感している者の比較的に多いのは農学科，林学科，獣医学科，農業経済学科，環境学科の学生である。

一般的にみて学生の農業に対するイメージは上述のようなものであるが，自由に記述されたものの中にも農業と農政，農業と食糧問題との関係が強く指摘されているのも西日本の場合と同じである。そのいくつかを例示すると，「農民教育が大切」，「使命感をもって農業をやるべきだ」，「農業は農政と深い関係があり，日本の農業が発展するもしないも農政次第である」，「今の農政は農業をますます困難にしている」，「抜本的な転換が必要である」，「異常気象で将来食糧が不足する」，「食糧問題の解決が何よりも大切だ」，「農業は国のために大切な産業だから発展させる必要がある」などと書かれている。ここでも学生の多くが日本の農業の必要性を認識しながら，不安定で確信のない農政のために日本農業の健全な発展の可能性を危ぶんでいる。現在の日本農業に困難をもたらしている真の原因は何か，この困難を解決して日本の農業を健全に発展させる方途は何かを，教師と学生が共に考えてゆく重要性を農学教育の中に正しく位置づけなくてはならない。

#### 5-4 日本農業に対する常識

農学系学部の学生が大学入学当初に日本農業の現状に対してどの程度の常識を持っているかを示したのが表5-7である。

農家の総戸数について500万戸と正しく答えている者は全体の学生を通じて2割しかいず，農家出身者も非農家出身者も差が認められない。農業高校出身者では正答者が若干多く33%を示した。

農業就業人口を600万人と正しく答えた者は2割弱で，これも農家出身者と非農家出身者の間に差がない。農業高校出身者では正答者が若干多く34%である。

米の年間総収量については，若干の変動があるので1,300万tと1,000万tの両方を正答とすると，全体の学生の正答率は約3割，これも農家出身者と非農家出身者で差がない。農業高校出身者では半数の者が正しく答えている。

米の10アールあたりの平均収量については全体の学生の23%が500Kgとしている。農家出身者の正答率は4割であって非農家出身者の2倍に

表5-7 日本農業に対する常識(%)

	全体	農家出身者	非農家出身者	農業高校出身者
日本の最近の農家の総戸数はどの位だと思いますか				
250万戸	24	28	23	37
500万戸	21	24	20	33
750万戸	6	4	6	0
1,000万戸	1	1	1	0
わからない	48	43	50	30
日本の最近の農業就業人口はどの位だと思いますか				
400万人	14	16	13	30
600万人	18	19	18	34
800万人	13	16	12	7
1,000万人	8	9	8	7
わからない	47	40	49	22
日本の最近の米の年間総収量はどの位だと思いますか				
700万t	3	4	3	7
1,000万t	10	12	9	10
1,300万t	18	19	18	40
1,600万t	6	6	6	3
わからない	63	59	64	40
日本の最近の米の10アールあたりの平均収量はどの位だと思いますか				
250kg	4	4	4	7
500kg	23	41	19	74
750kg	13	18	12	12
1,000kg	4	3	4	0
わからない	56	34	61	7
日本の食糧の全体の自給率はどの位だと思いますか				
30%	49	53	48	12
50%	22	26	21	3
70%	9	7	9	41
90%	2	1	2	3
わからない	18	13	20	41



なっている。また農業高校出身者ではさらに正答率が高く、3/4の者が正しく答えている。

食糧の自給率については、70%と正しく答えた者は全体の学生の1割にすぎない。これは農家の出身者でも非農家の出身者でも同じである。食糧の自給率を30%とした者が49%、50%とした者が20%いるが、これは穀物の自給率が4割程度のため、総合自給率をこの程度と取り違えているためと思われる。農業高校出身者では4割の者が正しく答えている。

次に学科別の学生についてみると(表5-8)、農家の総戸数について正答者の多いのは農業経済学科と獣医学科の学生である。農業就業人口について正答率の比較的に高いのは林学科、畜産学科、農業工学科、水産学科、農学科の学生である。米の年間総収量について正答率の高いのは環境学科、林学科、農業工学科の学生である。米の10アール当りの平均収量について正答率の高いのは農

表5-8 学科別学生の日本農業に対する常識(%)

学 科 別	農学	林学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農業 経済学
日本の最近の農家の総戸数はどの位だと思いますか									
250万戸	28	25	25	24	23	12	23	19	14
500万戸	20	20	17	24	18	42	14	28	59
750万戸	4	5	5	6	11	4	8	7	0
1,000万戸	1	1	1	0	2	0	2	0	0
わからない	47	49	52	46	46	42	53	46	27
日本の最近の農業就業人口はどの位だと思いますか									
400万人	13	19	14	15	10	10	14	17	4
600万人	17	20	16	19	20	12	18	11	14
800万人	14	10	10	14	10	20	13	22	36
1,000万人	11	5	7	7	10	14	5	4	23
わからない	45	46	53	45	50	44	50	46	23
日本の最近の米の年間総収量はどの位だと思いますか									
700万t	5	2	2	5	4	0	1	0	0
1,000万t	7	10	10	11	7	6	11	13	9
1,300万t	19	21	15	20	20	10	19	22	18
1,600万t	7	8	7	6	6	2	15	6	5
わからない	62	59	66	58	63	82	64	59	68
日本の最近の米の10アールあたりの平均収量はどの位だと思いますか									
250kg	2	4	3	7	7	8	4	1	5
500kg	30	23	19	22	19	18	15	15	27
750kg	16	17	14	14	10	8	13	15	9
1,000kg	2	6	3	3	18	0	4	1	0
わからない	50	50	61	54	46	66	64	68	59
日本の食糧の全体の自給率はどの位だと思いますか									
30%	46	54	48	46	48	58	51	52	55
50%	28	24	22	27	15	22	15	22	41
70%	8	9	9	8	10	0	11	13	4
90%	2	0	2	2	2	0	2	0	0
わからない	16	13	19	17	25	20	21	13	0

学科，農業経済学科，林学科，農業工学科の学生である。食糧の全体の自給率について正答率の比較的高いのは環境学科の学生である。

次に最近の日本で自給率の非常に低い農産物として学生があげたものを表5-9に示した。学生全体では小麦をあげた者が最も多く71%，次いで大豆を62%，飼料用穀物を43%の者があげている。大麦をあげている者は20%と少なく，一方肉類をあげている者が26%もいる。これは肉類の値上りやオーストラリヤなどからの輸入が新聞紙上でしばしば取り上げられるためと考えられる。以上の傾向は農家出身者でも非農家出身者でも同じであり，小麦，大豆および飼料用穀物の自給率が非常に低いことは学生がよく知っていることを示

表5-9 学生が最近の日本で自給率が非常に低い農産物としてあげたもの  
(2つ以上，%)

学 科	全 体	農 家 出身者	非農家 出身者	農業高校 出身者
米	2	7	1	4
小 麦	71	68	72	78
大 麦	20	25	19	30
大 豆	62	61	62	89
飼料用穀物	43	44	43	70
野 菜	2	1	2	0
果 物	3	4	3	4
牛 乳	2	4	2	7
肉 類	26	28	26	15
鶏 卵	2	1	2	0
わからない	7	7	7	0

表5-10 学生が最近の日本で自給率が非常に低い農産物としてあげたもの(2つ以上，学科別，%)

学 科	農 学	林 学	農芸化学	農業工学	畜産学	獣医学	水産学	環境学	農 業 経済学
米	1	4	3	4	2	0	2	0	0
小 麦	77	76	71	64	76	74	65	70	68
大 麦	22	21	18	21	19	22	18	19	14
大 豆	68	65	61	63	70	52	48	52	77
飼料用穀物	54	42	39	34	53	68	29	39	82
野 菜	1	2	1	3	2	0	3	0	5
果 物	2	3	6	4	0	4	5	2	0
牛 乳	2	1	2	4	2	6	1	0	0
肉 類	23	26	28	27	23	24	33	19	5
鶏 卵	1	1	3	3	1	4	1	2	0
わからない	5	7	6	7	8	6	15	6	0

している。農業高校出身者は8割程度の者が小麦，大豆，飼料用穀物の自給率を非常に低いとしており，肉類をあげる者は15%と少ない。

学科別の学生についてみると(表5-10)，小麦，大麦，大豆，飼料用穀物を自給率の非常に低い農産物として正しくあげた者の率の比較的高いのは農学科，林学科，畜産学科，獣医学科，農業経済学科の学生であった。

以上は農家戸数，農業人口，食糧の自給率や米に関するものに限られており，農業には勿論米以外の作目や畜産，林業，水産業なども含まれる。しかし以上の項目は農業の中でも重要なものであり，農学系学部の新入学生の日本農業に対する常識の大まかな程度を示すものといえよう。われわれ教師が日常的に接する学生の日本農業の現状に対する常識はこの程度である。農学教育は学生を知ることから始めなければならない。

## 6 学生の意識と農学教育

以上が今回の調査結果である。そこでみられるものは多くの学生が農業は大切だ、日本で農業をやる必要があるとしながらも、日本の農業の現実と将来に対する悲観的、懐疑的な姿である。その程度は学生の出身地域と大学、出身家庭の職業、所属学科、出身高校の種別などによって若干の違いがあるが、この傾向はすべてに共通している。このことは対象地域も異なり、未だ経済の「高度成長」の影響の大きかった3年前の時点での調査結果とも全く一致している。経済が所謂「減退成長」期に入り「農業の見直し」が叫ばれ始めているにもかかわらず学生の意識は基本的には変わらず前回と同様である。日本の農業の現実が学生の意識に与えている影響が深刻なことを示している。以下に学生の意識と農学教育との関係を考えてみよう。

**6-1 学生の進学動機** まず学生の進学動機をみると、入学前に農学系の学部を第一志望にしていた者は4割にすぎず、過半数は他の理科系の学部を第一志望にしていた。これは筆者が昭和49年に広島県の高校3年生を対象にして行った大学志望学部の調査<sup>8)</sup>(表6-1)をみても、進学校といわれるA普通高校では農学系の学部を志望する者は3%しかいない。徳島県での高校生の親が子供に進学を期待する学部をみても農学部を希望する者は殆んどいない(表6-2)。

(徳島大学には農学部がないので、この影響も若干考えられる)。親が子供に希望する職業の順位を東京都区部の調査結果でみても(表6-3)農民の地位はかなり低くみられていることがわかる。

これらは凡て1960年代に始まる経済の高度成長の下での農政と農業の現実を反映しているものといえよう。この農業の現実が親の意識に反映し、高校教師の進路指導に影響を与えているのである。そしてこのことが農学系学部の学生に一定の劣等感を与え勉学意欲をそぐことになる。農学系学部の学生も大部分が普通高校の出身者であり、表6-4にみられるように高校の段階で既に農業課程は第一志望たりえないのである。中学から高校への進学の過程で農業の現実が既に影響を与え、更に大学への進路決定をも大きく支配しているのである。このことは農学系学部での教育および卒業後の学生の進路にも大きな影響を及ぼすことになる。図1は以上の関係を図示したものである。日本の現実社会の政治、経済、文化の動向が社会一般の意識に反映し、これが更に生徒の親の意識や教師の進路

表6-1 高校3年生が進学希望の学部(広島県)

学 部	A普通高	B農業高
農 学 系	3%	56%
そ の 他	53	22
未 定	36	21
無 回 答	8	1
合 計	100	100

表6-2 親が子供に期待する第一志望学部(徳島県,%)

学 部	男 子	女 子
法 ・ 経	6.9	1.5
文	1.6	4.0
教 育	3.2	20.2
理 ・ 工	28.7	1.3
医 ・ 薬	8.3	20.0
農	0.8	0
家 政	0	0.7
未定・無回答	50.5	52.3
合 計	100.0	100.0

普通科高校2年生の父兄  
池田秀男 徳島大学学芸紀要  
(教育科学)XXI, 9(1972年)から作成

表6-3 親が子供に希望する職業の順位(東京都区部の成人男子)

調 査 年	1955年	1967年
大 学 教 授	1(位)	2(位)
医 者	2	1
公 務 員	3	4
会 社 課 長	4	5
会 社 員	5	3
巡 査	6	10
小 売 店 主	7	6
農 民	8	9
職 人	9.5	7
工 員	9.5	8
日 雇 人 夫	11	11

1955 ; SSM日本社会学会  
1967 ; 安田三郎ら  
「現代日本の階級意識」(有斐閣)から作成

8) 山谷洋二 ; 農業高校生の進路選択と農業に関する意識の調査研究 大学研究ノート15号(昭和49年)

表 6-4 高校生の現在 在籍する学科への志望状況

	普通科	農業科	工業科
調査人数	6,745人	4,101人	6,613人
始めから現在の学科に入りたかった	73%	37%	55%
ほんとうは別の学科に入りたかった	15%	50%	37%
どちらでもよかった	11%	13%	11%

文部省「中学校・高等学校における進路指導調査報告書」(昭和48年3月)より作成

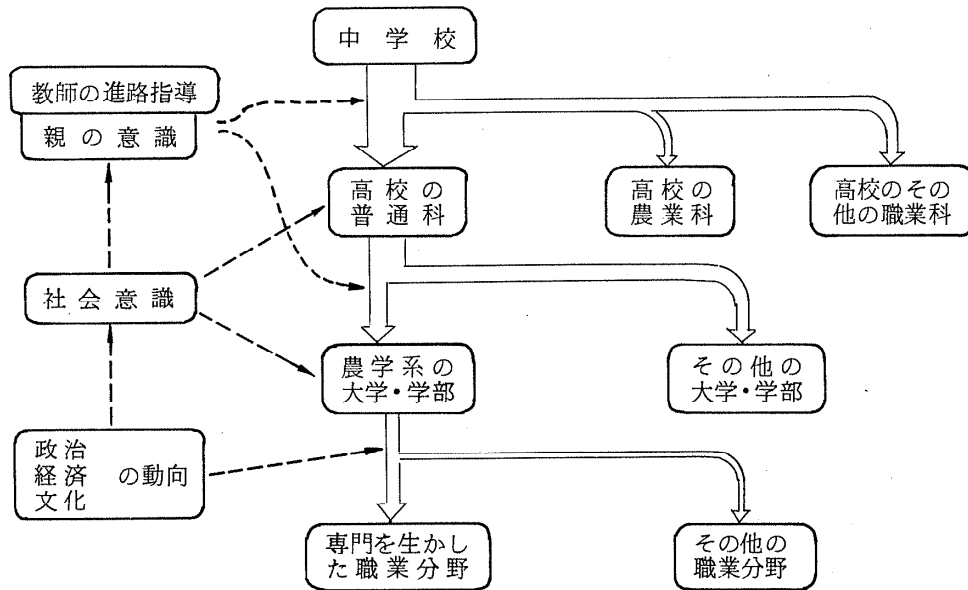


図1 学生・生徒の進路選択と社会意識

指導に影響を及ぼすのである。

6-2 学生の状態 では農学系の学部にはどのような学生が入学しているのだろうか。既にみたように学生の6割以上が都市部の出身者であり、家の職業も農業に全然関係のない者が7割近くを占めている。また高校の農業科の出身者は僅か2%にすぎず、高校当時農業の授業を受けたことのある者も3%しかいない。すなわち農学系の学部を第一志望として入学してくる学生は少なく、高校までの教育の中では農業は非常に僅かしか取扱われていず、しかも大部分の学生が都市部の出身者であって、家の職業も殆んどが農業に縁がなく、肌で農業に触れた体験を持つ者も殆んどいない。激しい受験競争の中では農業高校の出身者で大学に入学できる者は極めて稀である。殆んどどの学生が大学に入って始めて農業の授業を受ける事になる。大学での農学教育は何よりも先づこのことを念頭において行なわなければならない。

6-3 農業高校の問題 ここで農業高校の問題に少し触れておこう。ここでいう農業高校とは普通高校に併設の農業科を含むものとする。

近年農業関係への就職者の学歴構成が高まる(図2)につれて農業高校の重要性も高まっている。しかし農業高校の教育についても、農学系大学・学部の場合と同様に、或はもっと深刻な形で、わが国の農業の現実が大きな影を落している<sup>9)</sup>。農業高校自体の問題については多くの報告や提案があ

a) 産業教育教科調査委員会議(農業)報告(昭和50年3月)など

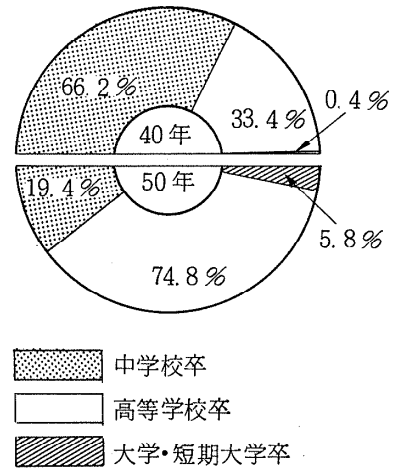
るので、ここでは大学進学の問題のみを取上げることにする。

この十数年間高校生の総数が増加する中で農業高校の生徒数は横ばいであり、高校生全体の中での比率も低下している（表6-5）。農業高校生で卒業後に農業に従事したいとする者は12%（表6-6）にすぎず、昭和49年度の実際就農者は約1万人、卒業後の全就職者の2割にすぎない（表6-7）。一方進学者の方は49年度には5千人を超え、卒業者の8%を占めた。進学者の内訳は大学と短大が半ばしている（表6-8）。

農業高校生の進学希望者が急増したが、国立の農学系の大学・学部へ入学できる者は非常に少ない。必要以上の小学科制をとり基礎的学力への配慮の足りない現行の職業高校の制度と、大学入試のあり方が変わらない限りこの傾向は今後も続くものと考えられる。この問題の解決策として所謂④の推薦入学制度を採用する大学がふえている（表6-9）。学生の意識調査の結果からみて農業高校出身者の農業に対する意欲が高いので、これは適切な措置であると考えられる。しかし公平で、適切な選抜方法がむつかしく、入学後の学力などの問題もあって、この制度を採用するに至っていない大学が多い。岩手大学農学部のように農業高校出身の農業後継者を無試験で入学させる営農技術学科を設置しようとする試みもある。

**6-4 大学・農学系学部に対する期待** 学生は大学に何を期待し、農学系学部をどうのものと観念し、ここで何

図2 農林・漁業関係への就職者の学歴構成



文部省「わが国の教育水準」昭和51年より作成

表6-5 農業高校の在籍者数と全高校生中の比率

年度	生徒数	比率
33年	216,691人	7.1%
43年	240,663	5.3
50年	196,012	4.5

文部省「学校基本調査」各年報より作成

表6-6 卒業後の進路希望（広島県）（昭和48年）

家の職業 卒業後の進路希望	A 農業高				B 普通高			
	農林漁業	関連産業	その他	全体	農林漁業	関連産業	その他	全体
農林漁業に従事したい	13%	0%	12%	12%	4%	0%	1%	2%
農林漁業関係の行政・教育・農協・研究会社など	28	54	8	24	8	31	4	7
食品製造関係	6	8	0	5	0	0	0	0
その他	34	12	60	38	45	40	68	58
わからない	6	8	10	6	10	11	12	11
無回答	13	19	10	14	32	17	15	22
合計	100	100	100	100	100	100	100	100

を学ぼうとしているのだろうか。まず現在の専攻をえらんだ動機として「農業がすき」を理由とする者は全学生の1割、「その職業に魅力がある」からとする者も24%にすぎない。大部分の者は自然や動物、生物学に対する憧れを理由としている。また「入学しやすい」とか「第一志望に入れなかった」ことを理由とする者も多い。このことは卒業後に希望する職種にも反映され、農業に従事しようとする

山谷洋二、「大学研究ノート」15号(1974年)31ページ

表6-7 農業高校卒業生の進路

年度	進学者	農林業就職者
33	1,979人 3.7%	25,643人 55.6%
39	2,119 4.3	12,626 28.3
43	3,351 4.1	
49	5,355 8.1%	11,058 20.1

\*農高卒業後全就職者中の割合  
文部省「学校基本調査」各年報より作成

者は1割にすぎず、多くの者は農業関連の仕事や公務員、研究者などを希望している。学生が大学に最も期待しているものは、(イ)就職のための専門的な知識や技術をつけること、(ロ)自然科学の学問的素養を身につけること、(ハ)教養を高め人間的に成長すること、この3つにほぼ3等分される。さらに農学系の学生として最も関心の強い分野は産業としての農業に限定されず、自然科学や公害・環境問題など広範な広がりを持っていることがわかる。農学教育は伝統的な産業としての農業を対象とするだけでなく、もっと広範な学生の要望に見合ったものにならなくてはなるまい。

表6-8 農業高校生の進学者の内訳

区 分	33年	39年	43年	50年
大学学部	1,086人	1,289人	1,701人	3,196人
短期大学	623	735	1,610	3,268
別科など	341	278	483	424

文部省「学校基本調査」各年報より作成

表6-9 推薦入学の実施状況（一部52年度より）

大学・学部	対象学科	推薦依頼先	推薦入学人員
弘前大 農	園芸学科	高校の農業関係の学科	定員の20%以内
岩手大 "	畜産学科	農業高のみ	若干名
山形大 "	園芸学科	高校の農業関係の学科	"
茨城大 "	畜産学科	農業高のみ	数名
筑波大	農林学類		定員の20%
千葉大 園芸	園芸学科	高校の農業科, 園芸科	4名程度
東京農工大 農	蚕糸生物学科	制限なし	若干名
岐阜大 "	農学科, 農業工学科	"	" , 10%以内
	林学科, 家禽畜産学科	"	" , 20%以内
三重大 "	林学科の林産学コース	"	"
" 水産	全 体	高校の水産関係の学科	定員の10%以内
鳥取大 農	農 学 科	制限なし	" 約10%
	農業経営学科	"	" 20~30%
島根大 "	農学科, 農林経済学科	農業高のみ	" 10%
	林学科	農業高又は工業高	" 10%
岡山大 "	農学科, 園芸学科	制限なし	" 20%以内
	畜産学科	"	" 20%以内
香川大 "	農 学 科	農業高のみ	" 10%内外
	畜産学科	"	" 20%内外
愛媛大 "	園芸学科, 農業工学科	"	" 10%以内
	林学科, 経営農学科	"	" 20%以内
高知大 "	暖地農学科, 農業工学科	"	若干名(約10%)
長崎大 水産	全 体	水産高のみ	定員の10%
宮崎大 農	農学科, 林学科, 畜産学科	農業高のみ	" 10%以内
	草地学科, 農業工学科	"	" 10% "
鹿児島大 "	農学科, 林学科, 園芸学科	"	" 10% "
" 水産	全 体	高校の水産関係の学科	

この他、宇都宮大農、山口大農、琉球大農の各学部も実施の予定

**6-5 農業に対する認識** 農学系の学生の農業に対する認識はどのようなものだろうか。農業に対するイメージとしては半数以上の学生が「大切だ」とし、4割近くの者が「自然との触れ合い」をあげているが、他方「労働がきつい」、「収入が少ない」、「不安定だ」などの消極的なイメージを持っている者も多い。農業と農政との関連の深いことを指摘する者が15%もある。日本の農業について「将来性がある」とする者は学生の僅か1/4にすぎず、3/4の者が「将来性がない」あるいは「(このままでは)将来性がない」と悲観的である。それにも拘わらず、大部分の学生は「わが国で農業をやる必要あり」とし、「必要なし」とする者は殆んどいない。ここでみられるものは、多くの学生が農業は大切である。わが国で農業をやる必要があるとしながらも、農政と農業の現実と将来に対する悲観的、懐疑的な姿である。農業就業人口、総農家戸数、米の年間生産量、10アール当りの米の収量、食糧の総合自給率などの農業に関する常識は殆んどないと言える程度だが、日本の農業に困難をもたらしている原因については、不安定な農政、大量の食糧の輸入、零細な経営規模、人口のわりに狭く山も多いことなどを正しくあげている。

**6-6 わが国の農業の現状** では学生の上のような認識のもとになっている農業の現状について次にみよう。

1960年代に始まる経済の高度成長の中での農業基本法農政、総合農政の下で、農業の分野においてもかすかすの技術革新や基盤整備、省力化、システム化などが行なわれ、農業の変貌は目をみはるものがある。

しかし、わが国の農業の本当の現実はどうなっているだろうか。国民経済に占める農業の地位(表6-10)をみると、個人消費支出のうち飲食費の占める割合は33%で依然として食糧の重要性は明らかであるが、国内純生産に占める農業純生産の割合は、15年前の10%から5%に半減し、産業としての農業の地位が著しく低下している。農業就業人口も1,200万人から600万人に半減している。一方総農家戸数が500万戸を割る中で二種兼業農家が6割を占めるようになっている(表6-11)。小中農家の経営困難の増大と没落、一方に資本主義的な大農経営の発展という階層分化が顕著である。農業労働者の都市への大量流出と老人・婦人化、一般化した出かせぎ、そして農村の過疎化とあかつぎの不足は深刻である。農家子弟の新規就農率3%という状態である(表6-12)。農業の急激な装置化・機械化に伴う農民の健康破壊、化学肥料の多投などによる地力の低下、農業用資材の価格の高騰と不安定な農産物価格、減反政策による農民の

表6-10 国民経済に占める農業の地位

年 度	35	43	49
個人消費支出(10億円)	9,065	20,104	78,449
うち飲食費の占める割合(%)	42.7	35.4	33.0
国内純生産(10億円)	13,293	43,005	113,063
うち農業純生産の占める割合(%)	10.2	7.3	4.9
輸入総額(100万ドル)	4,491	12,987	62,111
うち農産物輸入の割合(%)	19.7	18.5	15.1
総就業人口(万人)	4,465	5,018	5,185
うち農業就業人口(万人)	1,196	904	604
農業就業人口の割合(%)	26.8	18.0	11.6

昭和50年度「農業白書付属統計表」より作成

表6-11 専業・兼業農家戸数の推移

年 度	35	45	50
総農家戸数(万戸)	606	540	495
専業農家 { 戸数	208	84	62
{ 構成比	34.3	15.6	12.4
一種兼業 { 戸数	204	181	126
{ 構成比	33.7	33.7	25.4
二種兼業 { 戸数	194	274	308
{ 構成比	32.0	50.7	62.1

昭和50年度「農業白書付属統計表」より作成

表6-12 農家子弟新規学卒者農業就業者の推移

年 度	38	44	50
卒業生総数	1,285	1,217	918
うち就業者(A)	582	536	312
うち農業就業者(B)	90	48	10
うち高卒者の割合	31.8	66.4	81.8
就農率(B)/A	15.4	8.9	3.2

農林省「農家就業動向調査」より作成

生産意欲の減退などの問題が山積している。

貧弱な農業保護政策は農業の生産のいびつな発展をもたらし、外国農産物の輸入が増加して食用農産物の総合自給率が70%にまで低下した(表6-13)。作目別の自給率と粗生産額のシェア(表6-14)をみると、野菜、果実、畜産の発展と米作偏重の一方、麦類、大豆などの壊滅的な減少が特長的である。発展したとされる畜産にしても濃厚飼料の自給率は僅か30%にすぎず、家畜の多頭羽飼育による糞尿処理の問題も深刻になっている。

一方農業の機械化・装置化に伴う農業機械、農薬、肥料、飼料などの農業用生産資材部門の伸びは著しい(表6-15)。これに食生活の変化に伴う食品の加工(食品工業)・流通部門、さらに農業金融などを含めた農業関連産業(アグリビジネス)は大きく発展しているが、都市の消費者は依然として高い食料品価格と農薬や食品添加物などによる所謂「食品公害」に悩まされている。

**6-7 農学と農学教育** 1960年代に始まる「経済の高度成長」の中で、GNP中心の工業偏重と農業軽視の政策のために、わが国の農業は前述のような多くの問題をかかえている。このことは3年前も「減速経済」期に入ったといわれる現在でも依然として変わらず、農業と農学教育に対する社会一般の関心を低下させ、農学系学部へ入学して来る学生の将来への希望をすばめ、勉学意欲にも大きな影響を与えている。今年になって「総合食糧政策」も発足し農業見直しの機運も高まって来たが、学生の意識は上述のように変わっていない。こういう中でわれわれ教師は農学をどのようなものと観念し、どのように農学教育を行なうべきなのだろうか。

この二・三年来世界的な異常気象により食糧危機の到来に対する警告が散見されるようになり、国家の存立に影響を与えかねない程に低下している食糧の自給率などが漸く世人の話題になって、政府もやっと減反政策の再検討や「総

表6-13 作目別農業粗生産額のシェア(%)

年 度	35	43	49
農業粗生産額計	100.0	100.0	100.0
耕 種 計	81.2	74.4	70.5
米	47.9	45.5	36.5
麦 類	6.2	2.2	0.6
雑穀・豆類・いも類	6.7	3.5	3.5
野 菜	9.0	11.8	15.7
果 実	5.8	5.7	6.9
工 芸 農 作 物	4.4	4.5	4.5
養 蚕	3.1	2.6	1.8
畜 産	14.3	22.3	26.9

農林省「生産農業所得統計」より作成

表6-14 食用農産物の自給率の推移(%)

年 度	35	45	49	
総 合 自 給 率	90	76	72	
主要農産物の自給率	穀 物	83	48	40
	米	102	106	102
	小 麦	39	9	4
	大・裸麦	107	34	11
	豆 類	44	13	11
	大 豆	28	4	4
	野 菜	100	99	98
	果 実	100	84	83
	牛乳、乳製品	89	89	83
	肉類(鯨除く)	91	88	84
鶏 卵	101	97	98	
砂 糖	18	23	15	
参 考	食糧総合自給率(水産物を含む)	93	81	77
	濃厚飼料	67	33	30

昭和50年度「農業白書付属統計表」より作成

表6-15 農業生産資材部門の発展

生産資材	単 位	45年	49年
動力耕うん機	出荷台数(千台)	34.6	83.0
乗用トラクター	"	4.1	158.1
田 植 機	"	10.8	338.2
自脱型コンバイン	生産台数(千台)	4.1	117.4
農 薬	出荷額(億円)	829	1,937
高度化成肥料	出荷量(万t)	174.5	134.8
配合飼料	生産量(万t)	1,508	1,702
農業用塩化ビニール	出荷量(万t)	-	8

家の光「日本農業年鑑」各年版より作成



「食糧政策」をスタートさせた。現在でも世界人口の50%以上が食糧不足と栄養不良に苦しんでおり、発展途上国を含めてますます増大する人口に対する食糧供給の不足と不安定は重大である。わが国でも「米過剰」と裏腹の大量の食糧と飼料の輸入は、正常な経済発展と豊かな国民生活を築く上での桎梏となっており、食糧の生産と供給の合理化・近代化は急務となっている。このように、国民の食糧を生産し供給するという農業の伝統的な任務は依然として重要であり、農業の発展に科学的な基盤を与える農学の研究と教育も一層発展させなければならない。

一方生物を対象とする農業生産は環境と切離すことが出来ないで、資本主義の下での無計画な経済の高度成長がもたらした環境破壊から国民の生活と健康を守るという新たな大切な任務を農学に担わせるのがふさわしいと考えられる。資本主義の下での無秩序な経済発展は、人間を含めた自然の正常な物質循環を著しく破壊してきており、人間の存在自体をも脅かしかねない勢である。経済活動の結果生じた大気や土壌・河川・海洋などの汚染や変形、生物資源の涸渇などの事態を正しく評価し、人間の生存を可能にする自然生態系の動的平衡の維持・保全につくすことは農学に課せられた重要な課題である。生物の生産性に基本的に依拠するという農業の本質からしても、生物のもつ生産能力を十分に発揮できる自然環境の維持・保全が前提となる。

われわれ農学系学部の教師は、これらの重要で緊急な諸問題を正しく効果的に解決できる有為な人材をどうすれば養成できるだろうか。教育組織についてもカリキュラムについても農学教育の改革の必要性を痛感している。特に現在の歪んだ農政の下では、農業を軽視する社会的な風潮が学生の意識に反映しているので、この農業に対する負のイメージを何とかして取り去り、克服しないかぎり農学教育を営みのあるものにするには出来ない。わが国が現在直面している農業問題を避けて農学教育を考えることは出来ない。

従ってまず第一に、入学当初の学生に対して、農学の存在意義を認識させ、農学と関連分野への勉学意欲をもたせるための「農学概論」の授業を行なう必要があると考えられる。これには、(1)戦後の農業と農政の歴史、日本農業の現状把握と農業問題の正しい解決の方向、(2)農業の社会的役割、人類の食糧獲得方法の発展の歴史、(3)農学(農業の科学)と農業技術との関係、生物の生産性の本質、生物生産の人為的な制御などに対する基本的な認識と考察が含まれなくてはならない。

高度に発達した近代経済社会において、農学が食糧の生産と供給の近代化・合理化と、環境の維持・保全という社会的要請に正しく対処するためには、関連諸科学の最新の成果をも十分にふまえて、具体的な問題の理論的解明と解決のための技術的体系を形成しうるものでなければならない。ここ十数年来の生物科学の著しい発展と技術革新に即応した農学を発展させるためにも、学問体系上で密接な関連をもつ専門家の協同が必須である。

農学の対象は食糧とか環境の保全というような人間の生死にかかわる重要な問題なので、その解明には、自然科学と人文・社会科学の全視野を総動員して、さまざまな角度から十分に検討しなければならない。従って農学教育も、一学部だけの教育では決して達成できない。一般教育と基礎教育を含めて農学教育を有効に実施するためには、総合大学の中での広範な分野の諸科学との日常的な接触が必須の条件になる。農学のもつ社会的な役割からいって、学生が広い視野に立てるように一般教育科目を十分に履修させる必要がある。知識のかたよった悪い意味の「技術的人間」を養成する教育ではなく、青年の能力を全的に発揮させ、現実を正しく認識する能力をもち、本当の意味での社会の進歩に役立つ人材を育てる教育をこそ行なわなければならない。農学教育の中では、学問(農学)と社会とのかかわりを重視する総合的な教育が特に必要であり、4年間の学部教育を通じて、一般教育と専門(農学)教育とを相即相補のものとして実施する必要がある。

大学教育では何よりも学生の自主的な勉学態度が前提とされなければならないが、教育効果をあげるためには教員側も、明確な教育目的と目標に基づくカリキュラムを設定し、その履修指導を行

なう必要がある。農学は生物のもつ精巧な生命現象に対する科学的認識を基礎にして、その人間生活向上への応用を志向する学問であるから、学問諸分野の基礎的概念の修得と、それにもとづく論理的な思考方法の体得があって始めて農学教育が有効に実施できるのである。従って生物学、物理学、化学、地学、数学、外国語、経済学、論理学などの基礎が農学系学部の教員との密接な接触を保ちながら教授される必要がある。

次に専門教育を効果的に履修するために必要とされる専門の加味された、いわば「専門基礎科目」ともいうべき科目の履修を強化する必要がある。これは主として農学系学部の教員が担当し、農学的志向の加味された密度の高い基礎教育であって、以後の専門教育の負担を軽減させ、その効果的な履修を保障する上で非常に重要な地位を占めるものと考えられる。これには、解剖学、組織学、細胞学、生理学、進化学、微生物学、栄養学、実験動物学、生物物理学、分析化学、生物化学、分子生物学、高分子化学、熱力学、生物計測学、生物統計学、推計学、実験計画法、遺伝学などが考えられるが、各専攻課程の教育目的に沿った必要性に応じて、各科目の適正な位置づけが必要となる。

現行の修業年限4年間の学部段階では、農学とその関連諸科学の基本的原理や課題解決のための方法論を重視して、学生の創造的能力の開発に力点をおく教育を行ない、個別的な専門教育はその入門程度に止めるのが妥当である。勿論現行の学部教育を一応の完結教育と見なさなければならない社会的状況の下では、基礎的・理論的側面の重視がそのまま応用と技術的側面の極端な軽視となってはならない。急速に発展し変化する社会に適応し、その変革の旗手になりうるための最少限の知識と技術を与えるのが学部段階の教育の目標であり卒業後の大学院或は社会での専門的、職業的訓練を最も効果的なものにするための素地を与えるのが目標である。専門教科目は細分化された専門分野を教授し、問題の解決に当って、分析的接近のための手段になるものであるが、必ずしも従来の内容に拘束されることなく、明白な教育目標に対応して合理的に編成されなければならない。個別科学の極度の専門化、細分化に基づく教科目の細分化と相互の関連の希薄化が、問題の解明に対して分析的接近のみを強調する弊害をもたらしているので、教科目間の連関の強化と、総合的観点の重視が重要となる。内容は可能な限り、その専門分野の基本的原理や基礎的概念と基本的な技術の教授に限定することが望ましい。専門教育のしめくりとして総合化を志向した教科目の実施が必要である。卒論、ゼミナールなどについても従来のタコツボ的傾向をあらため、指導教員を複数にするなどして総合的な視野がもてるような配慮をしなければならない。

農業も人間の生産労働の一つであるから、農学は単なる自然科学的な認識に止らず、具体的な状況の中での実践的な学問である。農学を実際に生産労働にたづさわる農民のためになる農業技術へ結びつけるという視点が大切である。このことは基本的には都市の労働者・消費者の利益にもかなうことになる。厳しい状況の中でも沢山の農民が農業を続けている。それは農業が人間の生命と生活を続けるのに絶対に必要な食糧を生産し供給するという重要な役割をもっているからである。すでにのべたように今の学生の大部分は全然農業の体験をもたず、このままでは農業の実態も殆んど知らず、農学教育はすべて机上の空論になり効果が期待できないことになる。普通、大学の付属農場での実習が行われるが、理想的には、実際の農村に入って、現実の中で悩み惑いながら汗みどろになって働いている農村青年と一諸になって農業を体験する必要がある。そうする中で始めて農村の青年が何を悩んでいるのか、農業の経営を困難にしているものは何であるかを学生が肌で感じることができるようになる。そして農業というものを自分の問題としてとらえ、具体的問題の解決への意欲と、その解決への手がかりを求めて学問的欲求を奮いたたせられるであろう。ここに農学教育の原点があると思う。

## おわりに

以上農学系学部新入学生の意識調査の結果にもとづいて、農学教育についての若干の提案を行ってきたが、何よりもわが国の農業（広義）の現実の中から農学教育の改革を真剣に考えてゆくことが必要である。農業と農学の内容は時代と共に変る。日本の農業をどう変え、どういう形で発展させるべきなのか、農学はどうあるべきなのかを教師も学生も一諸になって考えてゆかなくてはなるまい。そのことによって始めて農学系学部が、すぐれた専門の学問と技術を身につけ、真の社会的要請に応えうる卒業生を社会に送り出すことが出来るようになるだろう。日本の土地にしっかりと根を張った立派な農学の研究と教育が発展すれば、日本の農業も正しく発展し、農学系学部の社会的な存在価値も一段と高まるものとする。

大学研究ノート 通巻 28 号

1977 年 2 月 発行

発行 広島大学 大学教育研究センター

広島市東千田町 1 丁目 1-89

TEL (0822)41-1221(内線706)

印刷 (株) 高橋 騰 写 堂

広島市千田町 3 丁目 2-29

TEL (0822)44-1110(代)

## 大学研究ノート・バックナンバー

- 第 1 号 (1971. 8) サセックス大学のカリキュラム：自然科学系ハンドブック 1966 - 67 より  
 ..... 大学問題調査室〔編訳〕
- 第 2 号 (1971. 9) ドイツの大学における Institute 数及び教授数に関する集計  
 ..... 近藤春生
- 第 3 号 (1971. 10) 高等教育に関する主要外国雑誌目録 ..... 岩村 聡〔編〕
- 第 4 号 (1972. 7) 欧米の医学カリキュラム ..... 杉原芳夫〔編訳〕
- 第 5 号 (1972. 8) アメリカ合衆国の主要大学に関する基本資料  
 ..... 関 正夫・川上昭吾〔編訳〕
- 第 6 号 (1973. 2) サセックス大学のカリキュラム：人文・社会系ハンドブック 1966 - 67 より  
 ..... 大学教育研究センター〔編訳〕
- 第 7 号 (1973. 3) 諸大学学寮規程・規則集(1) ..... 大学教育研究センター〔編〕
- 第 8 号 (1973. 8) ドイツ大学改革と学生生活の現況 マールブルク大学を中心として  
 ..... 千代田 寛・阪口修平
- 第 9 号 (1973. 9) 広島大学医学部紛争における医局・講座，大学院および学位制度問題資料  
 ..... 杉原芳夫〔編〕
- 第 10 号 (1974. 1) 理学部生物学科の調査 - カリキュラムを中心に ..... 川上昭吾
- 第 11 号 (1974. 2) 大学院・研究体制に関する文献目録 ..... 喜多村和之〔編〕
- 第 12 号 (1974. 2) 大学院・学位に関する規程集 ..... 喜多村和之〔編〕
- 第 13 号 (1974. 3) アメリカ工業教育協会報告書：工学系学生のための教養教育  
 ..... 関 正夫〔編訳〕
- 第 14 号 (1974. 3) 諸大学学寮規程・規則集(2) ..... 大学教育研究センター〔編〕
- 第 15 号 (1974. 6) 農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する意識の調査・研究  
 農業高校生の進路選択と農業に関する意識の調査研究  
 - 普通高校生との比較 - ..... 山谷洋二
- 第 16 号 (1974. 9) カリフォルニア大学の農学系カリキュラム ..... 山谷洋二〔編訳〕
- 第 17 号 (1975. 1) ヨーロッパの学生宿舎を見て ..... 横尾壮英
- 第 18 号 (1975. 2) 学寮の管理運営の法的検討 ..... 畑 博行・村上武則
- 第 19 号 (1975. 3) 大学院・学位制度に関する資料集 ..... 寺崎昌男〔編〕
- 第 20 号 (1975. 10) 大学の大衆化をめぐって ..... 大学教育研究センター〔編〕
- 第 21 号 (1976. 1) 大学英語教育に関するアンケート調査 - 広島大学における学生の意見 -  
 五十嵐二郎・稲田勝彦・岩村 聡  
 藤本黎時・湯浅信之・
- 第 22 号 (1976. 3) 西ドイツ高等教育改革の青写真 ..... 天野正治
- 第 23 号 (1976. 3) 宮城教育大学の教育改革 - 視察報告 - ..... 教師教育プロジェクト〔編〕
- 第 24 号 (1976. 8) 広島大学学生の宿舎と生活 - アンケート調査から -  
 ..... 黒川正流・上里一郎・岩村 聡
- 第 25 号 (1976. 9) 高学歴社会 - その現実と将来 - ..... 大学教育研究センター〔編〕
- 第 26 号 (1976. 11) 大学の組織・運営に関する総合的研究  
 ..... 組織・運営プロジェクト〔編〕
- 第 27 号 (1977. 1) 教師教育カリキュラムに関する研究 ..... 教師教育プロジェクト〔編〕

## Contents

### Preface

1. Purposes of the Survey ..... ( 1 )
2. Methods of the Survey ..... ( 5 )
3. Attributes of the Students ..... ( 9 )
4. Motive for Course Determination ..... ( 11 )
5. Students' Attitudes toward Agriculture ..... ( 17 )
6. Students' Attitudes and the Agricultural Education ..... ( 24 )

### Conclusion

A Survey on the Freshmen's Attitudes  
of Agricultural Courses in College and  
Universities toward their Course  
Determination and Agriculture.

Yoji Yamatani